教科書文庫
4
220
42-1935
2000067149

改訂 女子東洋史

文學博士
加藤繁 著

東京 神田 冨山房

42982
教科書文庫
4
220
42-1935
2000067149

資料室

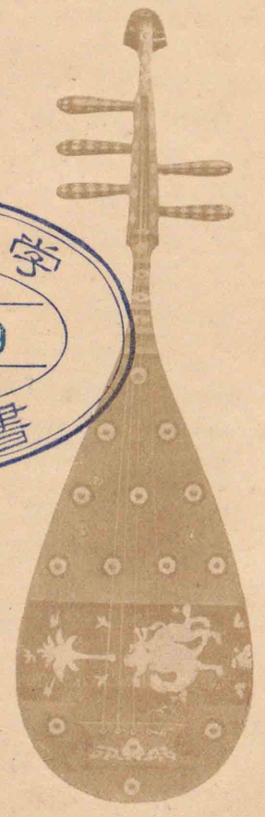
教科書文庫
4
220
42-1935
2000067149

濟定檢省部文
用科史歴校學女等高　日八十二月一年十和昭

訂改

史洋東子女

士博學文
著繁藤加



広島大学
教
67149
図書

広島大学図書
2000067149

田神房山冨京東

46
220
昭10

例言

一、此の書は高等女學校の教科書として去る昭和五年始めて編纂し、今回新に改訂を施したものである。

一、中等學校に於ける東洋史の課程では、東洋諸國の盛衰興亡と其の文化の由來とを示し、學修者に東洋の一國民たる日本人としての自覺を促すべきものである。著者はかかる見地に立つて執筆したものであるが、自ら其の期待に副ひ得なかつたことを遺憾とする。

一、近來の歷史教科書は、學修者の記臆を容易ならしめんとする餘、往々にして備忘錄的・箇條書的に傾くやうである。本書は事

件の首尾を取りまとめて述べ、讀者の印象を深めようと勉めた。

一、紀年は便宜上西暦を用ひ、近世後期に於いては、日本・支那の年號をも併せ記すことゝした。

一、本書には初め地圖を缺如したが、今回一枚刷地圖數葉を挿入し、學習者の便宜を圖ることゝした。

一、本書の編述に就いては、學友文學士和田清氏の懇切なる援助を受けた。又挿圖の選定等は同氏及び文學士岩井大慧氏に負ふところが頗る多い。深く謝意を表す。

昭和九年八月

著者識す

目次

第一篇　上古

第一章　太古　夏殷……一

第二章　周　春秋戰國……三

第三章　上古に於ける政治・社會組織……五

第四章　春秋戰國時代の學術……七

第二篇　中古

第一章　秦……一〇

第二章　前漢……一三

第三章　後漢……一七

第四章　佛教の傳播……二〇

第五章　三國　晉　五胡……二三

第六章　南北朝……二六

第七章　隋　唐の初期……三〇

第八章　唐と諸外國との關係……三三

第九章　唐の中期及び末期……三六

第十章　唐代の制度・文化……三八

第三篇　近古

第一章　五代　宋の初期　遼……四三

第二章　宋の中期及び末期　金……四六
第三章　宋代の文化……四九
第四章　蒙古の世界經略……五三
第五章　元……五六
第六章　明の初期　帖木兒……五九
第七章　明の中期及び末期……六二
第八章　歐人の東漸……六五
第四篇　近世
第一章　清の興隆……六七
第二章　清代の制度及び學術……七一
第三章　ムガル帝國　英人の印度侵略……七三
第四章　鴉片戰爭　長髮賊の亂……七六
第五章　露佛の東方侵略……七九
第六章　日本の勃興　日清戰爭……八二
第七章　戊戌の政變　北清事變……八五
第八章　日露戰爭　韓國併合……八七
第九章　清の滅亡……九〇
第十章　中華民國……九二
第十一章　滿洲帝國の成立……九七
餘論（東洋史上の大勢と日本）……一〇〇

改訂

女子東洋史

第一篇　上古

第一章　太古　夏殷

幾千年と明かには知りがたい悠遠の昔、支那黃河の畔に、肥沃な黃土を耕して農業を營む人民があつた。後の歷史家が漢民族といふのは卽ち此の人民である。彼等は多くの部落――ついで國――を造つて割據して居たが、やがて最も有力な國の君主が、他の諸國を大まかながら統一して、其の朝貢を受けるやうになつた。此の有力な君主は自ら王と唱へ、その位を子孫に傳へた。

文獻に傳へられた最初の王朝は夏であつて、其の創立者禹は、大洪水を治めて支那の國土を平かにし、人民を安んじたと稱せられて居

太古

夏

る。夏は十七世にして桀に至り、殷の湯王に滅され、殷は二十九世にして紂に至り、周の武王に滅された（紀元前一二〇〇頃）。斯く王朝の更迭することを名づけて革命といふ。すべて殷以前の事蹟は詳かには知り難く、周に至つて稍〻明瞭と爲る。

黄土地帶の景

革命とは天命が革まるといふことで、德有るものは天命を受けて王と爲り、位を子孫に傳へることが出來るけれども、若し子孫にして德を失へば天命は去つて他の有德者に移り、同時にその王朝は亡びることを意味するのである。此の學說は、周が殷を滅したこと、廣く云へば從來武力に依つて新王朝が舊王朝を滅したことを辯護せんが爲め、周代の學者に依つて唱へられたところのものである。革命說は、後來野心家が王朝を倒す際に利用せられ、同時に君臣道德の堅實なる發達を妨げ、支那民族の禍となつた。

又、夏王朝に先だつて堯舜といふ二人の君主があり、いづれも大聖人で、堯

は有德の人を求めて舜を得、之に位を讓り、舜は禹を得て位を讓つたと傳へられて居る。此れは天命說に慊らぬ學者たちが、其の理想を示さんが爲めに作り出した說話に過ぎないので、決して史實ではなく、又血統を重んじ氏族を重んずる古代に於いて實際に有り得べき事でもなかつた。

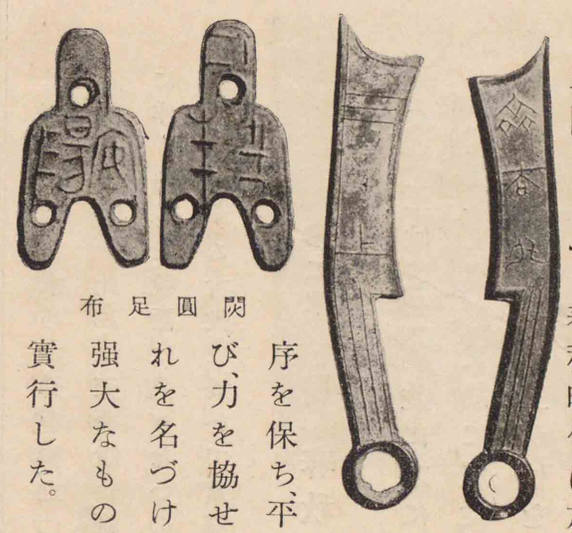
詩經は周代の詩を集めた書で、儒敎の經典の一つである。

第二章　周　春秋戰國

周の武王は殷王朝並に之に味方した國々を滅して後、一族功臣を封じて諸侯と爲し、又周に服從した舊諸侯の所領を安堵せしめた。武王崩じて、其の子成王が位を繼いだが、成王は幼年であつたので、武王の弟周公が成王を助けてよく天下を治め、制度・禮法を定め、文物燦然たるに至らしめたといふ。其の後七王を經て厲王に至り政亂れ、周の王室は危殆に瀕したが、子宣王立ち、內は賢臣を用ひ、外は夷狄を攘ひ、中興の英主と稱せられた。宣王の武功を歌つた詩は、現に詩經の中に存してゐる。然るに其の子幽王の時、政復た衰へ、犬戎之に乘

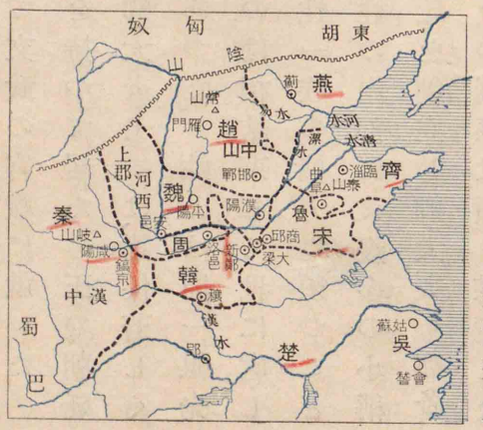
じて侵入し、王は其の爲めに殺された。是れより先、周室は鎬京(西陝)に都したが、幽王の子平王は難を避けて東の方洛陽(河南)に遷つた(前七〇七)。此れを周の東遷といふ。

周の東遷より後、凡そ三百年の間を春秋といひ、春秋の後約二百年を戰國といふ。春秋時代に於いては、周の王室は諸侯を統べる力無く、諸侯互に爭うて、強きものは弱きものを併せ、而して支那の北方・西方に居住した戎狄は之に乘じて內地に侵入した。此の時支那國家の秩序を保ち、平和を維持するの途は、諸侯が王室を尊び、力を協せて戎狄を擊ち攘ふことであつた。此れを名づけて尊王攘夷といふ。而して諸侯中の強大なものは起つて各諸侯を糾合し、尊王攘夷を實行した。此れを霸者といふ。其の中著名なものは齊の桓公・晉の文公など五人で、此れを春秋の五霸といふ。



齊刀は春秋戰國時代の齊の貨幣、文に齊法化(貨)とある。閔(藺)圓足布は趙の藺邑の貨幣。

戰國時代には、諸侯の爭が一層烈しく爲り、戰が絕えず行はれた。是れ戰國の名ある所以である。小諸侯は大抵滅され、燕・齊・楚・秦・韓・魏・趙の七國が最も盛で、其の君主は王號を僭した。此れを戰國七雄といふ。周の王室は、實力は固より、權威も衰へ果て、一小諸侯に過ぎなかつた。而して七雄中、秦が最も强盛であつた。蘇秦に依つて唱へられた合縱、張儀に依つて唱へられた連衡は、秦に抵抗すると秦に和親するとの差こそあれ、ともに秦を相手として の政策であつた。秦は王政の時、六國を平げて天下を統一した(前二一)。



戰國七雄圖

第三章　上古に於ける政治・社會組織

封建制度

殷以前は姑く措く。周代に於いては、王の命に依つて諸侯が設けられ、諸侯は子孫世襲して其の國土を統治した。此れを封建制度といふ。諸侯の臣には卿・大夫・士の三階段があつた。卿・大夫・士もそれぞれ其の地位を世襲し、國君の命を承けて文武の官職に就いた。王は諸侯を統御する外、直轄地として畿内を持つて居た。王の朝廷にも卿・大夫・士が置かれた。諸侯並に王の卿・大夫・士には、諸侯若しくは王と同姓のものもあれば、異姓のものもあつた。姓とは同一祖先から出た一族の稱號で、姓を同じうするものは相結束して世に處した。周の姓は姬である。周王朝の建設は姬姓一族の協力に須つことが多かつたのである。年を經るに及んで、姓の内部に又幾多の小稱號を生じた。此れを氏といふ。諸侯は各〻氏を創立し、卿・大夫も亦各〻氏を持つて居た。春秋の頃には、同姓の人々の關係は頗る疎遠となり、仇敵の如く相爭ふことすら辭せなかつたが、氏を同じうするものは、團結して盛衰興亡を共にした。戰國時代には、俊傑の士は氏を恃まず、單身奮つて事功を立てるやうになり、同時に氏の力も衰へた。

姓氏

庶人

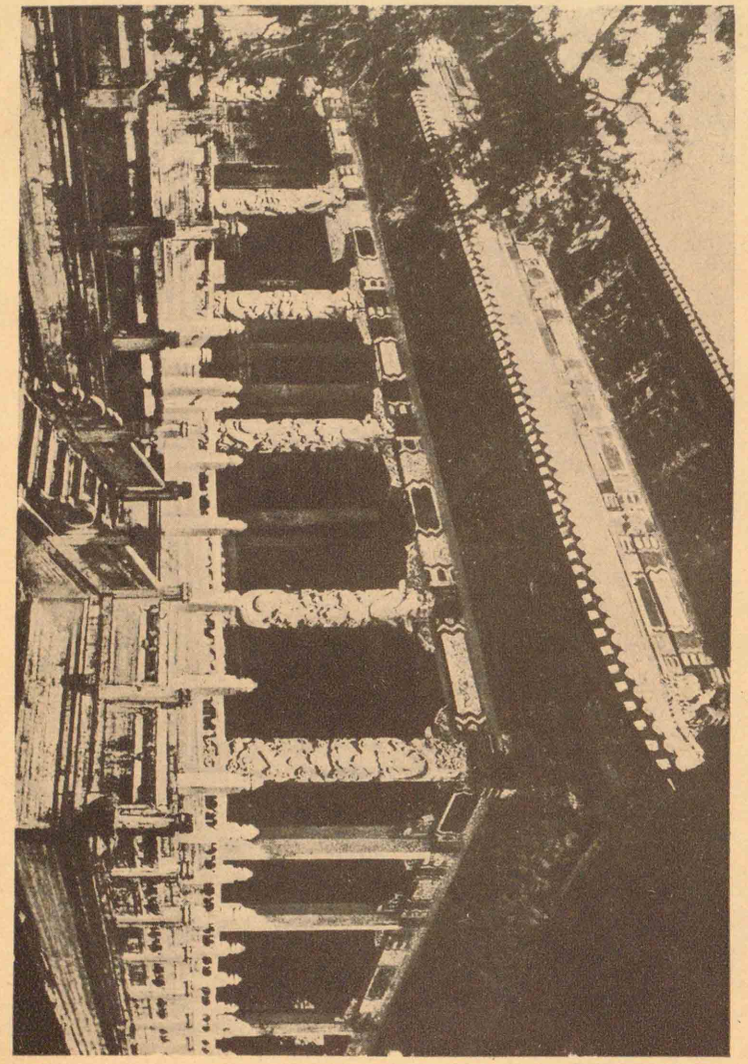
庶人の間にも血族關係が重んぜられたけれども、姓氏の制度は行はれなかつた。當時商工業も發生して居たが、庶人の大多數は農耕及び養蠶に從事した。彼等は周の盛時には、田百畝づつを分配せられたと傳へられる。彼等は租稅として穀物・絹等を納め、年々若干日の勞働を捧げ、又兵役にも服した。

第四章　春秋戰國時代の學術

春秋の末から戰國へかけて、學術が大に發達した。此れは世亂れ民苦しむを觀て、之を救はんと、學者たちが苦心考究した爲めであつた。其の主要なものを列擧しよう。

儒教

一儒教　儒教の始祖を孔子といふ。孔子は春秋の末、魯(東山)に生れた(前五二)。初、魯に仕へ、ついで諸國を歴遊したが志を得ず、七十四歳にして歿した。其の教は仁を本とする。仁は今日いふ人道又は博愛に



成大殿（山東曲阜）

近い。しかし孔子は漫然博愛を説いたのではない。人と人との關係は種々の事情に依つて必然的に親疎厚薄の別を生ずるが故に、之を無視して萬人を一律に取り扱ふべきでない。人の世に生れ出でて最初に關係を持つところのもの、最大の恩誼を受けるところのものは父母である。故に仁を行ふには、父母に對する道卽ち孝から始めなければならぬ。而して之を擴充して兄弟に及ぼし、夫婦・朋友に及ぼし、主君・長上に及ぼし、出來るだけ多くの人を愛さなければならぬといふこと、此の平明堅實なる倫理觀が孔子の敎の主眼であつた。尙ほ彼は政治と道德とを分離せしめず、爲政者自ら己を正しうすると共に、人民をして各〻德を修めしめ、之れに依つて國を治め、天下を平かにすべきことを說いた。戰國の中頃に至り、孟子が出でて、孔子の敎を祖述した。彼は仁の外に義を說き、又王道・霸道の別を說いた。戰國の末には荀子が出でて復た儒敎を鼓吹した。

二墨子・墨子名は翟、戰國の初の人である。其の敎の中で名高いの

は兼愛である。兼愛とは天に則り、一切の人を平等に愛利することをいひ、儒家の人倫の別に隨つて、愛に差等を設けるのと頗る相違する。

楊子

三楊子　楊子名は朱、又戰國の初の人である。彼曰く、「我が一毫を以て天下を利するも吾之を與へず、天下の物を盡して我に奉ずるも吾之を取らず、人々一毫を損せず、人々天下を利せずして、天下自ら治まらんと」。卽ち其の說は極端な個人主義である。

法家

四法家　法家は戰國最末期の人韓非に依つて大成せられた。彼は、人間は權力を以て支配すべくして、惠愛を以て感化すべからざるものと認め、隨つて仁義・禮樂を排し、專ら法を嚴にし、賞罰を明かにして國を治むべきことを說いた。

以上は倫理・政治等に關する敎學であるが、此の外、天文・曆法・醫學等も發達した。

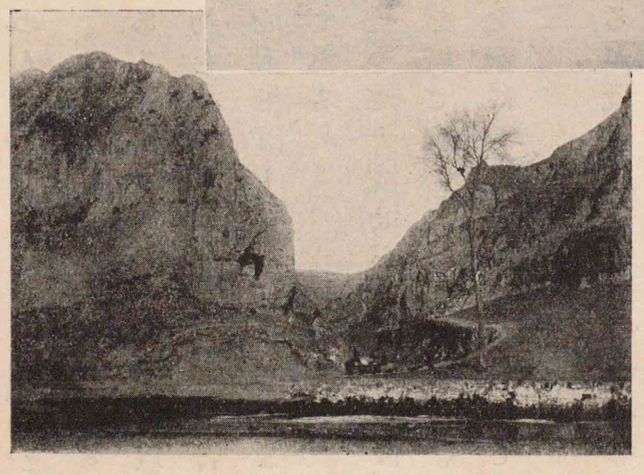
第二篇　中古

第一章　秦

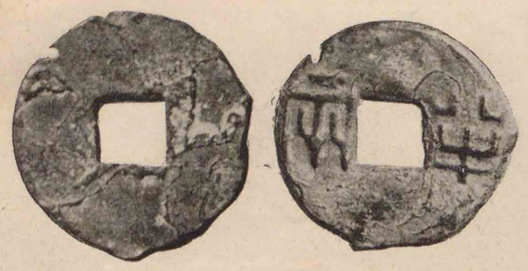
秦の始皇帝

秦王政は統一成つて後、都を咸陽(陝西)に定め、自ら始皇帝と稱し、丞相・御史大夫・太尉(之を三公といふ)以下の官を置いて天下の政を掌らしめた(前二二一)。是れより先、周以來封建制度が行はれ、天下の土地は諸侯に分封せられ、諸侯の領土の大部分は卿・大夫等に分ち與へられたのであるが、春秋から戰國に亙り、諸侯が他の國を滅して新に得た疆土は、多くは自己の直領地となし、之を郡又は縣と名づけた。秦國に於いても同樣であつたから、六國を滅すに及んで、天下は悉く秦の郡縣となつた。此の時封建を併せ用ふべきことを主張するものもあつたが、始皇帝は之を納れずして全國を三十六郡と爲し、郡を分つて縣とし、郡に守を置き、縣に令を置き、それ〴〵朝廷より任免することとした。世に之を郡縣制度といふ。郡縣制度は、諸侯を置かずして皇帝自ら全國を統治し、且つ卿・大夫・士を置かずして自由に官吏を任用する制度である。始皇帝が封建制度を全廢し、之に代ふるに郡縣制度を以てしたことは、前後に比類のない一大變革である。始皇帝はついで丞相李斯に命じて貨幣・度量衡並に文字の樣式を一定せしめ、天下統一の完成を期した。此の時李斯の定めた書

咸陽城外と函谷關北門



郡縣制度



半兩錢

半兩錢は始皇帝の鑄造した銅錢。天下一般に圓形の錢を用ひること、是に始まる。

匈奴

南越

長城

（今の長城は主として明代の改築にかゝる）

體を小篆といふ。

當時蒙古の地に匈奴（蒙古民族）といふ大國が興つて支那を侵したので、始皇帝は名將蒙恬を遣はして之を擊ち攘はしめ、北邊に長城を築いた。此れが所謂萬里の長城の始めである。又兵を南方に派して南越（今の廣東・廣西・佛領東京の地）を征服させた。漢民族の國土は從來、大略黃河の南北より揚子江沿岸に及ぶに過ぎなかつたが、是に至つて著しく擴大せられたのである。

此の如く內外多事であつた上に、始皇帝は土木を起し、宮殿を造營したので、租稅・徭役增加し、人民大に苦しみ、學者も新政を非謗した。始皇帝は一に嚴刑を以て之を彈壓し、書を焚き儒を坑にした。此れが爲め人心離反し、始皇帝崩ずるに及んで東南一帶の地に叛亂起り、

秦の滅亡

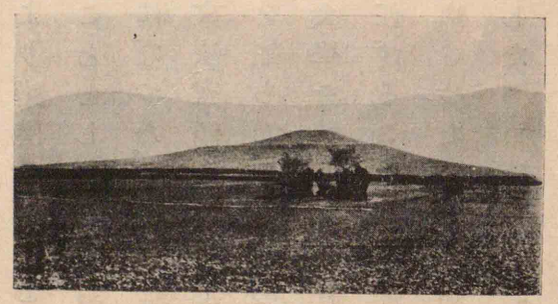
漢の高祖

中にも項羽・劉邦の二人が勢最も盛で、頻に秦軍を破つた。而して劉邦は遂に咸陽に攻め入つて、秦を滅した（前二〇六）。

第二章　前漢

劉邦は秦を滅して後、項羽と爭ふこと四年、羽を斃して帝位に卽き、都を長安（西）に定めた（前二〇二）。此れを漢の高祖といふ。劉邦はもと沛縣（江蘇北部）の一村長で、平民であつた。平民より起つて皇帝と爲ることは、從來未だ曾つて有らざるところで、此の後に於いても極めて稀であつた。

高祖は秦室の孤立して早く亡びたのに鑑み、一族子弟を封じて王とした。此くて天下は自ら朝廷直轄の郡縣と封建諸侯の王國とに分かれ、郡縣・封建併用の姿となつた。但し封建といつても、王位が世



臨潼縣東秦始皇帝陵

襲せられるだけで、卿・大夫・士の階級無く、政務は秦以來の官吏制度に依つて運轉せられたので、古の封建とは大に相違して居た。高祖が一族を王としたのは、勿論之を以て皇室の羽翼とする爲めであつたが、事實は之を裏切つた。即ち高祖の孫景帝の時には、吳・楚等の七國が聯合して兵を擧げ、朝廷に叛いた。所謂吳楚七國の亂とは是れである。亂はやがて平定せられたが、朝廷は此れより諸侯の領土を削減し、且つ朝廷より官を派して之を治めしめることとしたので、封建は名のみと爲り、專ら郡縣制度を用ひると同樣になつた。

七國の亂

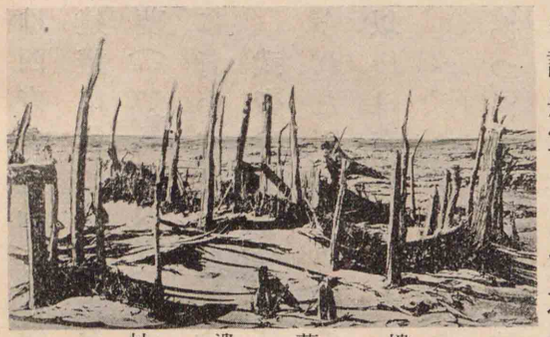
武帝

景帝の子武帝は英雄の主であつた。漢初以來、法家・儒家其の他色色の學が行はれたが、武帝は人心をして向ふ所を知らしめる要ありと爲し、儒教を尊んで治國の本とした。而して大學を興して五經博士を置き、儒教を授けしめ、學成れるものを官に任ずることとし、又郡國に命じて學問・品行の優れたものを朝廷に薦めさせた。帝は始めて年號を設け、其の即位の年（前一〇四）を建元元年とした。

匈奴征伐

張騫

是れより先、匈奴は勢頗る盛に爲り、常に北邊を侵して殺掠を恣にし、漢の朝廷を困しめた。高祖の如きも匈奴を征して白登（山西北部）に至り、反つて匈奴の爲めに圍まれ、和を請うて僅に免れたのであつた。武帝は匈奴のやがて支那國家を危くすべきを察し、衛青・霍去病以下の諸將軍をして之を擊たしめ、先づ河南（内蒙古オルドス）及び河西（甘肅省西北部）の地を取つて郡とした。ついで漢の大軍はゴビの沙漠を横ぎつて大に單于（匈奴の帝王）を破り、杭愛山の麓なる其の根據地を衝いた（前一九）。此れより匈奴は衰運に向つた。



樓蘭遺址

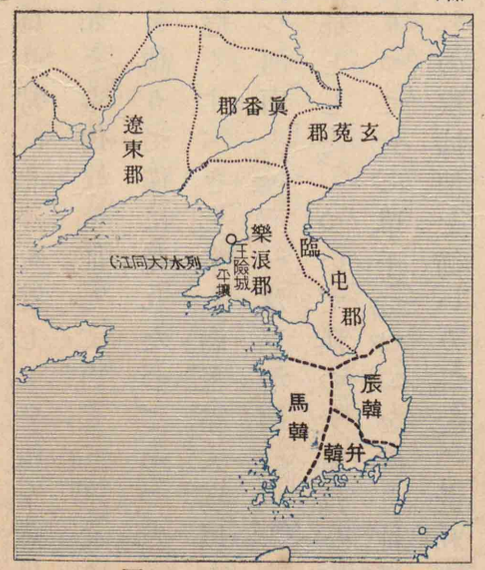
初め、武帝は大月氏（中央アジヤ）とともに匈奴を夾み擊たんことを圖り、張騫を同國に遣はして之を勸めしめた。是れ支那の使節が中央アジヤに至つた始である。大月氏は漢の勸めに應じなかつたけれども、是れより西域との交通が開

西域

け、西方の產物も次第に支那に輸入せられた。ついで武帝は張騫の建議に從つて、公主を烏孫(伊犂)國主に嫁せしめて之と同盟を結び、又樓蘭(ロブノールの南)・大宛(中央アジヤ、フェルガーナ)等を伐ち從へた。かくて西域諸國は匈奴に背いて漢に服從するやうに爲り、匈奴の勢は益〻蹙まつた。

朝鮮

武帝は又朝鮮を征服した。朝鮮とは今の朝鮮半島の北部に建てられた國で、初め殷の王族箕子の子孫と稱するものが王と爲り、漢初以後は燕人衞氏が代はつて君臨した。武帝の時、衞右渠が王位にあつたが、武帝は水陸より兵を進めて之を擊ち滅し、其の地を樂浪等の四郡(後、三郡と爲る)とした。朝鮮國の南には馬韓・辰韓・弁韓等いはゆる韓民族の國々があつたが、此等は武帝の征服を免れた。

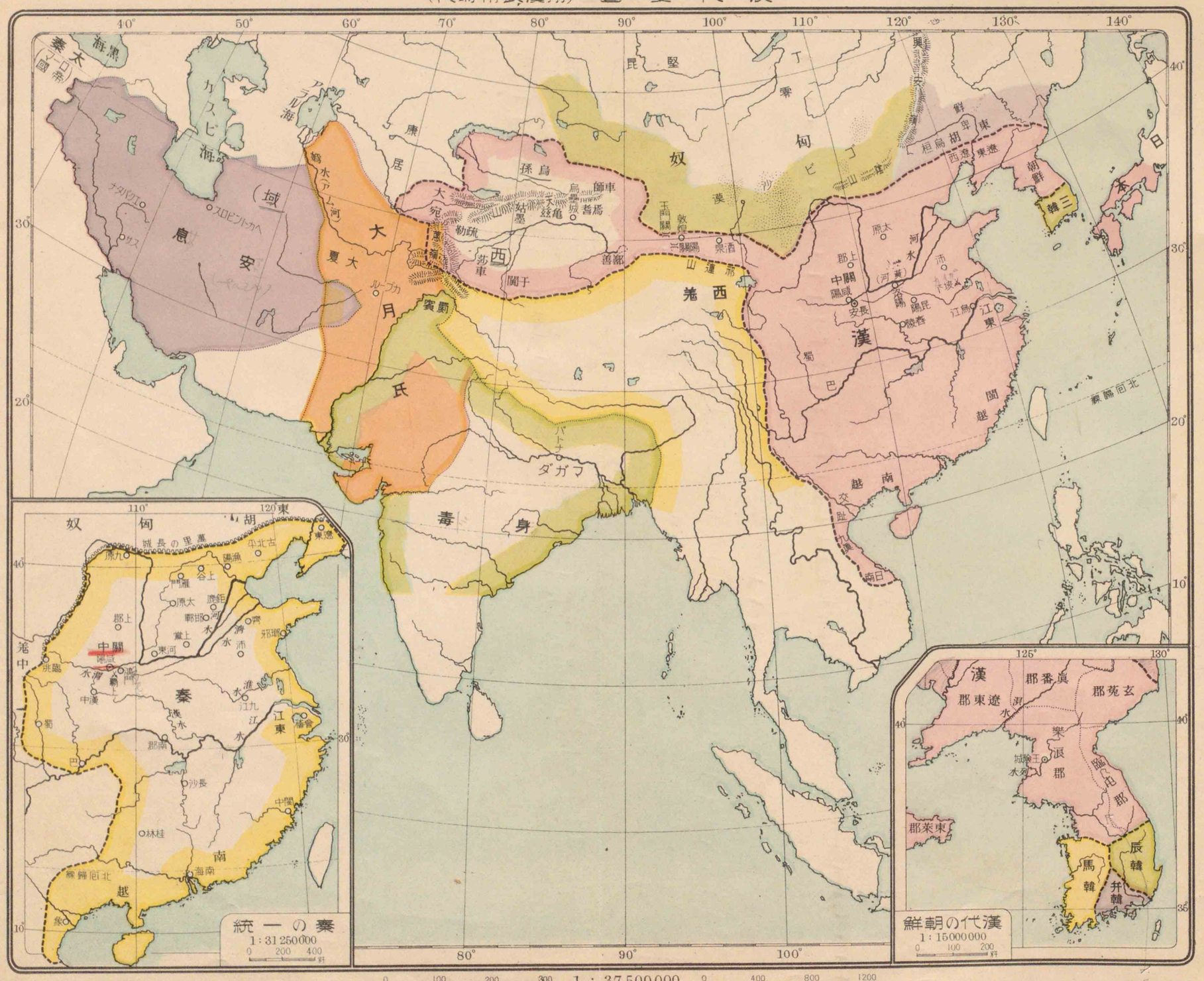


三韓圖

漢代要圖（前漢武帝時代）

奴
匈
漢
西羌
大月氏
大宛
烏孫
烏桓
鮮卑
東胡
高麗
毒身
ダガマ
越南
交趾
九真
南日
日本
三韓
朝鮮
遼東
遼西
上郡
中關
安長
原太
河水
黃河
江東
閩越
蜀
巴
敦煌
酒泉
玉門關
陽關
北河關塞
康居
烏孫
烏壘
焉耆
車師
姑墨
龜茲
疏勒
于闐
莎車
月氏
ルーブカ
ダガマ
ルーブカ
ヤルカンド
ヤルカンド
ヤルカンド

漢代要圖（前漢武帝時代）


奴隸
匈
漢
西羌
安息（域）
大月氏
身毒
越南
朝鮮
三韓
日本
統一の秦
1:31250000
漢代の朝鮮
1:15000000
1:37500000

武帝の末年

宣帝

王莽

漢の滅亡

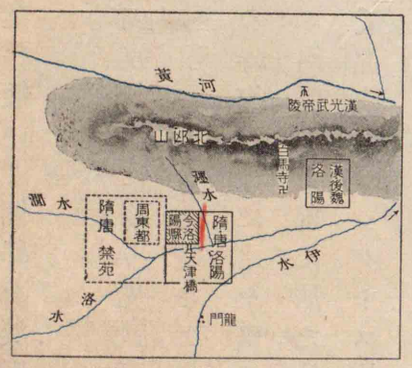
武帝の外國經略は右の如く成功したけれども、其れが爲め人民は過重の負擔に苦しみ、集まつて盜賊と爲るものも少くなかつたので、晩年帝は外征を中止し、專ら民力の休養を圖つた。帝の孫宣帝は、治績大に擧がり、中興の主と稱せられた。

宣帝の後、天下事無く、人民は平和を樂しんだが、朝廷では外戚が權力を私し、其の一人王莽は遂に帝位を簒ひ、國號を新と改めた(紀元八)。漢の高祖より此に至るまで二百十年であつた。

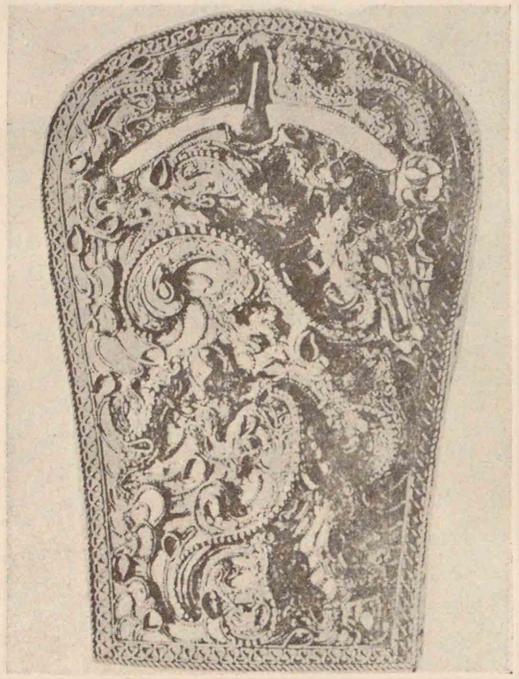
第三章　後漢

後漢の光武帝

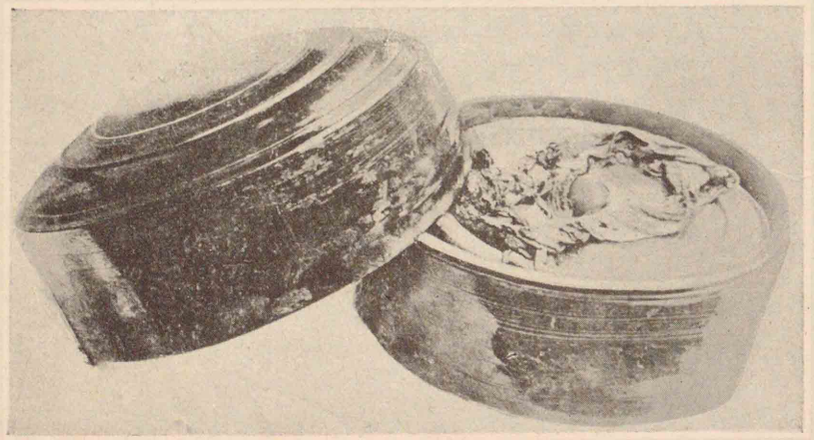
王莽位に在ること十五年、威力衰へるに及び、漢の宗室等競ひ起つて之を滅した。宗室の中、最も戰功の多かつた劉秀は推されて帝位に卽き、洛陽に都した(五二)。此れを後漢の始祖光武帝といふ。帝は武を偃せ文を興し、大



洛陽圖



樂浪出土金帶鉤



樂浪出土漆塗鏡奩

匈奴

に治績を擧げた。子明帝・孫章帝は善く其の業を繼いで儒學を奬勵し、同時に外國經營にも努力した。

匈奴は後漢の初、南・北に分かれて相爭ひ、南匈奴は漢に降り、光武帝に請うて長城の内に移り住んだ。北匈奴は勢强く、屢漢を侵したので、明帝の時、軍を出だして之を擊ち破り、和帝の時復た大に之を破つた。北匈奴は衰へて遠く西方に遁れ、是れまで内蒙古東部に居た鮮卑が代はつて蒙古の地を占領した。鮮卑は蒙古族とツングース族とが混合して出來た所謂東胡民族である。

西域

西域諸國は初、北匈奴に服從して居たが、明帝の時、班超に命じて之を招き降さしめた。班超は西域都護に任ぜられて龜茲(庫車)に駐すること十餘年間、巧に諸國を綏撫した。超、年老い、官を罷めて後、西域は復た後漢に叛いた。

班超の父班彪及び兄班固は漢書の著者として名高い。妹班昭も一代の學者で、漢書の足らざるを補ひ、女誡を作り、又章帝の子和帝に召されて皇后

樂浪出土漆塗鏡奩

〔東京帝國大學藏〕

出土の地、右に同じ。全部黑漆を塗り、處々に赤青黃等の顏料を以て人物・樹木等を描く。技術頗る優秀。徑九寸二分五厘、高さ約四寸、後漢初期の作。

樂浪出土金帶鉤

〔朝鮮總督府博物館藏〕

朝鮮平壤大同江の南、漢の樂浪郡治の南から發掘されたもの。質は純金、母龍一兒龍七を彫刻し、處々に綠色の寶石を嵌入して居る。技術の精巧、人を驚かす。長さ三寸二分、幅最廣部二寸一分、後漢初期の作。

大秦

竝に女官の師と爲り、曹大家（曹といふのは、昭が曹氏に嫁した爲めである）の號を賜はつた。

海上交通

後漢の初、ローマ帝國は西部アジヤを征服したが、其の事は支那にも聞え、支那では之を大秦國といつた。班超の西域都護であつた時、使を大秦に遣はしたけれども、旅行困難の爲め中途から引き返した。是れより先、支那の絹は、陸路、西アジヤ商人の手を經て大秦に輸入せられ、大秦人も之を珍重し、直接に支那と交通せんことを希ひつゝあつたが、後漢の桓帝の時、安息（ペルシヤ地方）を破り、ペルシヤ灣に臨んだ地を占領したので、其の皇帝アントニヌスは始めて海路より使を支那に送つた（一六六）。後漢の歷史に大秦王安敦とあるのは、アントニヌスを指すのである。此れより、大秦の商人は今の廣東地方に來つて貿易し、爾後西晉の頃まで繼續した。

後漢の滅亡

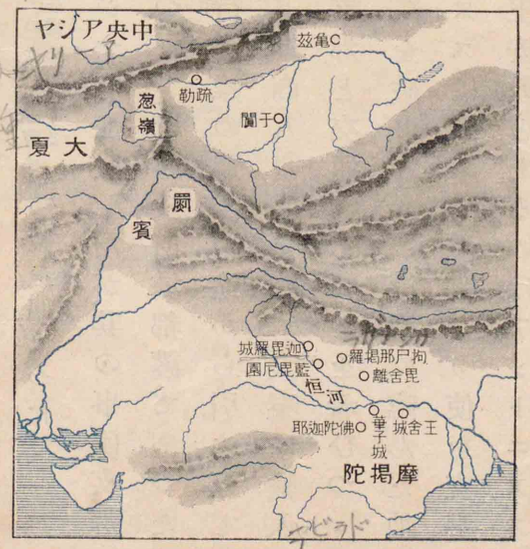
後漢の國運は明帝・章帝の時を極盛とし、其の後宦官・外戚交〻權力を專らにし、末年には宦官の驕橫甚しく、大學の書生之に反抗して、殺戮禁錮せられるなどの事があり、國衰へ、群雄割據の世と爲り、獻帝の時

遂に滅亡した(〇二二)。

第四章　佛教の傳播

印度の四種姓

太古の世、漢民族が黃河沿岸に蔓延しつゝあつた頃、中央アジヤの地にアリヤン人種が起つて南に西に移動した。其の南したものは印度に入り、土民を征服して數多の國を建てた。此れは約四千年前のことであつた。此の國々には僧族・士族・平民・奴隷の四つの種姓が出來、僧族は祭祀・宗教を掌り、士族は政治・軍事を掌り、平民は農・牧・工・商を掌り、奴隷は勞働に服した。僧族以下三種姓はアリヤン種で、奴隷は土民である。僧族の

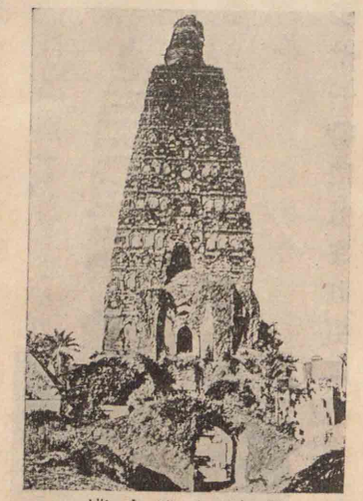


古代印度圖

婆羅門教

釋迦牟尼

傳へた宗教を婆羅門教といふ。其の教は四種姓の間に於ける貴賤の別を嚴にし、特に僧族の尊貴を主張したので、僧族は自ら專横に流れ、他の種族を苦しめた。是に於いて、婆羅門に反抗して新宗教を唱へる偉人が現はれた。其れは釋迦牟尼である。釋迦牟尼は中印度迦比羅城(ネパール國タライ地方)の王子であつて、名を悉達といひ、孔子と略同時の人である。二十九歳の時、山に入つて苦行すること六年、遂に何人も邪慾を絶ち、正道を行はば皆佛(覺者の義)と爲り、一切の苦惱を去り、未來に於いても無限の幸福を享くべく、種姓の別は毫も之に與ることなきを悟り、此の旨を以て世の人々を教化し、八十歳にして入寂した。故に其の教を佛教といふ。釋迦はもと種族の名、牟尼は智者の義で、悉達が釋迦族の出である爲め、世に之を釋迦牟尼といひ、略して釋迦とも呼



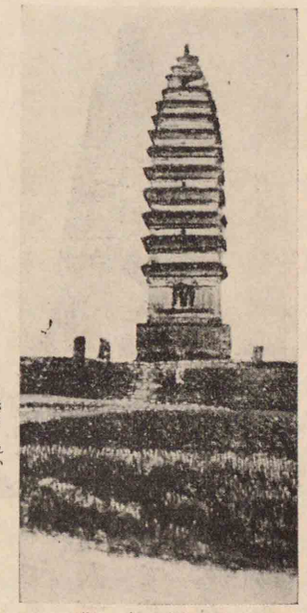
佛陀加耶古塔

んだのである。

阿育王

釋迦入滅後二百餘年を經て、中印度摩揭陀國に阿育王出で（支那の戰國末期）、深く佛教を信じ、之を印度全土に弘めた。阿育王の後四百餘年を經て、大月氏にカニシカ王出で（後漢の半ば過ぎ）、又深く佛教に歸依した。是れより先、大月氏は安息を破り、北西印度を併せ、勢頗る盛であつたが、カニシカ王位に即くに及んで、大に佛教の弘通を圖つたので、佛教は中央アジヤ一帶に弘まり、更に葱嶺を越えて天山南路の諸國にまで傳播した。

カニシカ王



白馬寺塔（河南省洛陽附近）

佛教支那に入る

佛教が始めて支那に入り來つたのは前漢の末である。しかし其の後、後漢の中頃までは猶ほ微々たるものであつたが、桓帝・靈帝の頃大月氏・安息・印度等の諸國から僧侶が相ついで支那に來り、布教に從

事し、且つ經典をも翻譯したので、佛教は漸く一般に行はれるやうになつた。此れは主としてカニシカ王佛教保護の影響であつた。

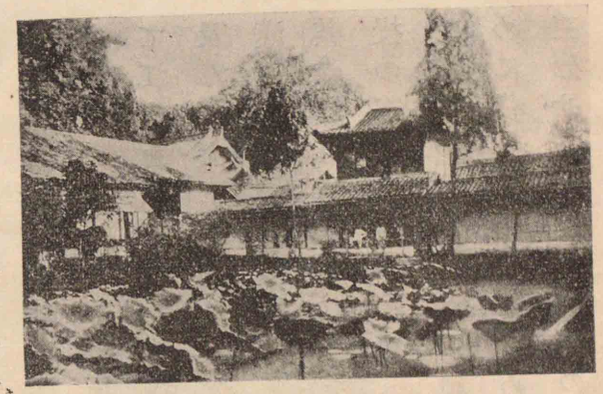
第五章　三國　晉　五胡

後漢の獻帝の時、四方に割據した群雄の中、曹操及び孫權が有力であつた。曹操は許（河南）に據つて中原を攻め取り孫權は建業（蘇江）に據つて江南を領した。曹操、荊州（湖北）の劉表を擊ち、表死し、其の子の降るに及んで、大軍を江上に浮べて孫氏を威服せんとした。是れより先、前漢の景帝の遠孫、劉備といふものが劉表に依つて居たが、是に至つて其の謀臣諸葛亮（孔明字は）を遣はして孫權を說かしめ、遂に力を協せて曹操の軍を赤壁（湖北）に迎へ擊ち、火を放つて大に之を破つた（二〇八）。此れを赤壁の戰といふ。戰の後、劉備は荊州を孫權と分ち、又諸葛亮の勸めに從ひ、益州（四川）を攻め取つて成都に都した。かくして天下は自ら三分せられた。曹操の子曹丕、獻帝を廢して自ら帝位に即き、國を魏

三國

諸葛亮

丞相祠堂何處尋。
錦官城外柏森森。



諸葛亮祠堂（四川省成都）

と號する（二〇）に及んで、劉備は國を漢と號し（俗にいふ）、孫權も吳と號し、各〻帝位に卽いた。史家此れを三國といふ。此の時、智勇の士雲の如く現はれ、三國は之を用ひて互に優勝を爭うたので、面白い挿話が數多く傳へられて居る。

諸葛亮は漢の丞相と爲つてよく國を治め、兵を練り、劉備崩じて後は、其の子後主を輔けて兩漢統一の業を恢復せんとし、先づ此の時最も强大であつた魏を滅さんが爲め、兵を率ゐて七たび祁山（甘肅）に出たけれども、病の爲めに空しく陣中に斃れた。

蜀相

丞相の祠堂何の處にか尋ねん。
錦官城外柏森森。
映階碧草自春色。
隔葉黃鸝空好音。
三顧頻煩天下計。
兩朝開濟老臣心。
出師未捷身先死。
長使英雄淚滿襟。

杜甫

階に映ずるの碧草、自ら春色。
葉を隔つるの黃鸝、空しく好音。
三顧頻煩、天下の計。
兩朝開濟す、老臣の心。
出師未だ捷たず、身先づ死す。
長へに英雄をして淚襟に滿たしむ。

西晉

此の後、漢は衰へて魏のために併せられ、魏は其の相司馬炎に國を簒はれ、吳も繼いで司馬炎に滅された。炎は天下を統一して（二八）洛陽に都した。此れを西晉の武帝といふ。

西晉は封建と郡縣とを併用し、子弟を封じて王とし、自ら官吏を任命することを許したが、之が爲めに諸王の勢が强く爲り、武帝の子惠帝の時には、汝南王以下八人の王が兵を起して政權を爭うた。此れを八王の亂といふ。この時官吏學者等の間には淸談といふものが流行し、世務を疎かにして空理を談じ、身を以て國難に當らんとするものが無かつたので、世は愈〻亂れ、晉の朝廷は坐して滅亡を待つ有樣であつた。之に乘じて起つたのが、五胡の民族である。

五胡

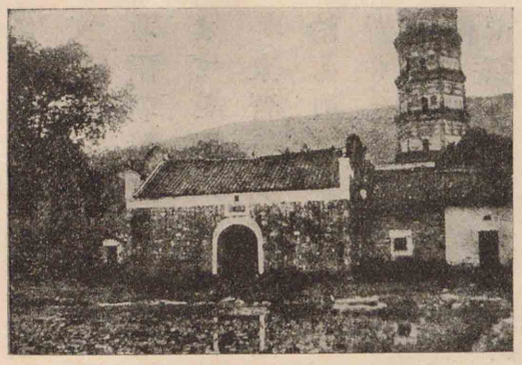
五胡とは匈奴・羯（以上蒙古族）・鮮卑（東胡種）・氐・羌（以上チベット族）の五民族である。此

等の民族は、後漢の末より河北・山西・陝西・甘肅・四川の内地に移住し、其の人口が年と共に增加した。初は支那の官民や人民から虐待せられ、朝廷は寧ろ之を保護したくらゐであつたが、晉の衰へた頃には頗る勢力を得、山西に居た匈奴の酋長劉淵は獨立して王と稱し、ついで皇帝と稱へ、其の子劉聰は洛陽を陷れて、晉の懷帝(惠帝の子)を捕へた(三一)。是れより後、五胡の諸蠻族入り亂れて江北一帶の地に相爭ふこと百餘年、國を建つるもの前後十六國に及んだ。故に之を五胡十六國といふ。其の中、前秦(氐)が最も盛であつた。

懷帝捕はれ、西晉亡びて後、數年を經て、皇族司馬睿、江南に據つて國を建て、晉室を復興した(三二)。之を東晉の元帝といふ。元帝の後、七代を經て孝武帝に至つた時、前秦の皇帝苻堅は大軍を率ゐて東晉に迫つたが、晉は淝水(安徽)の一戰に之を破り(三八)、國を保つことを得た。

第六章　南北朝

東晉は淝水の戰の後一時勢を得たけれども、やがて內亂の爲めに衰へ、遂に劉裕の爲めに位を簒はれた(四〇)。劉裕は國を宋と號した。此れより稍〻後れて、北支那は後魏(鮮卑)に依つて統一せられ、南・北ともにそれぞれ一朝の君臨する世となつた。因つて名づけて南北朝といふ。南朝は宋の後、齊・梁・陳の三朝が相繼いで興つた。その中、梁の武帝は佛教の保護者として名高い。北朝では後魏第六代の君孝文帝の時、都を洛陽に遷し、鮮卑本來の言語・衣服を用ひることを禁じて、支那の其れを用ひしめ、又均田の制を行つた。これは支那文化に心醉した結果であつたが、武强の風は此れより衰へた。繼いで後魏は分かれ、後周・北齊の二國と爲り、後周は北齊を併せて、後魏の舊版土を統べた。後魏及び後周・北齊が卽ち北朝である。後周の君は後



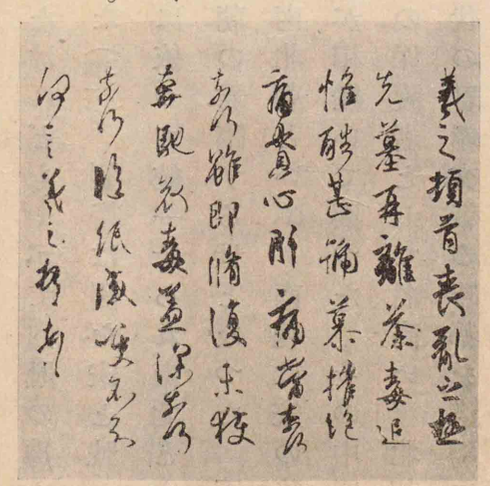
南朝の寺(江蘇省廬山西林寺)

隋の統一

東晉・南北朝の文化

魏と同じく鮮卑の出で、北齊の君は漢人であつた。されば北朝の中、後魏・後周二朝は五胡に屬したのである。後周はやがて外戚楊堅(漢人)に國を讓つたので、堅は帝位に登り、長安に都した(五八一)。此れを隋の文帝といふ。文帝は間もなく陳を滅して天下を統一した(五八九)。南・北兩朝對立すること約百五十年、西晉亡び五胡興つて以來是に至るまでを數ふれば、約二百六十年であつた。

東晉及び南北朝は動亂の世で、政治も亂れがちであり、支那固有の學術も進まなかつた。但し書畫には見るべきものがあり、東晉の王羲之や顧愷之の遺墨は神品と稱せられて居る。佛教は南・北ともに流行し、堂塔・伽藍・佛像なども盛に造られた。鳩摩羅什など西域高僧が續々と支



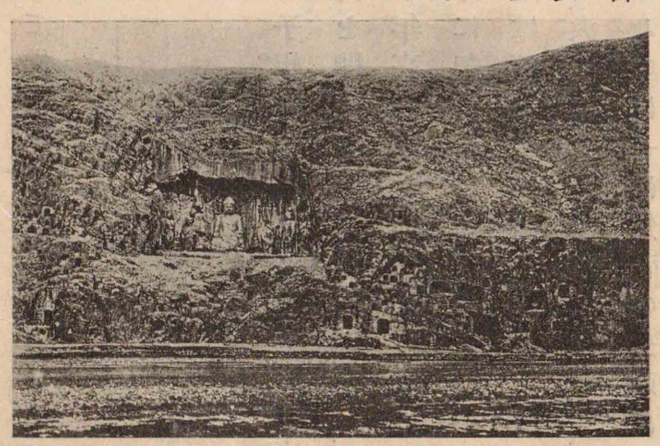
王羲之の書
(帝室御物、喪亂帖)

道教

雲崗石佛(山西省大同の西)

する獨立研究の氣運も起り、僧智顗は陳末・隋初の交、新に深遠なる天台の法門を開いた。智顗は天台山(浙江)に登つて端座思惟すること九年、遂に一宗を創始したと云ふ。

佛教と共に道教も流行した。道教は後漢の末に起り、不老不死の道を說く教であつたが、常に佛教と相爭つた。後魏



龍門石佛(河内省洛陽の南)

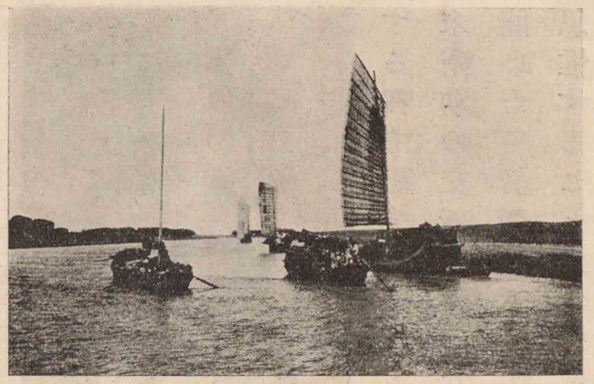
の僧侶の中からも遠く印度に赴いて法を求めるものが現はれた。而して佛教の教理に對

那に來つて譯經や布教を行ひ、支那

の太武帝及び後周の武帝は道教を信じて佛教を惡み、寺を毀ち僧尼を還俗せしめたこともあつた。

第七章　隋　唐の初期

隋の煬帝



大運河

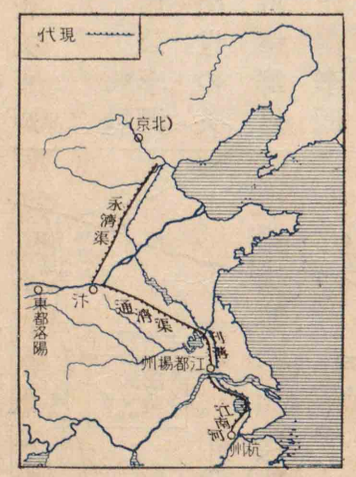
隋の文帝の子煬帝は奢侈に耽り、宮殿・苑囿を營み、運河を開き、又屢〻兵を外國（林邑・吐谷渾）に用ひた。末年、高句麗を征して敗れるに及び、叛亂四方に起り、帝は臣下の爲めに弑せられた。隋は西晉末以來分裂した支那國土を統一し、大功を立てたに拘はらず、二世にして亡びたのは、一に煬帝の失政に因る。

高句麗

高句麗は滿洲民族であつた。最初、渾江（鴨綠江の支流）の畔に居住したが、西晉の時、もとの

朝鮮三郡の地を占領し、今の南滿洲より、朝鮮北部に亙る一大國を形成した。此の時、朝鮮南部では、韓民族の中から百濟（馬韓）及び新羅（辰韓）が起り、高句麗・百濟・新羅の三國が半島に鼎立することと爲り、此の形勢は隋代までも繼續した。而して南方では、初には百濟が強く、後には新羅が盛であつたが、南北を通じて最も強大であつたのは高句麗で、隋の煬帝の遠征軍をも擊ち破り得たのである。

煬帝の開いた運河を通濟渠（今の河南省河陰縣より淮水に至る）・刊溝（淮水より今の江蘇省揚州に至る）・江南河（今の江蘇省鎭江より浙江省杭州に至る）・永濟渠（黃河より今の河北省北平南方に至る）といふ。此れに因つて、長安・洛陽より船を浮べて一路杭州に到り、又幽州（北平）に到ることが出來た。此れは主として遊幸の便を圖つたものであるが、而も之に依つて運輸・交通は著しく發達した。煬帝は我が推古天皇と時を同じうした。我が國は是れより先、晉・



隋代運河圖

唐

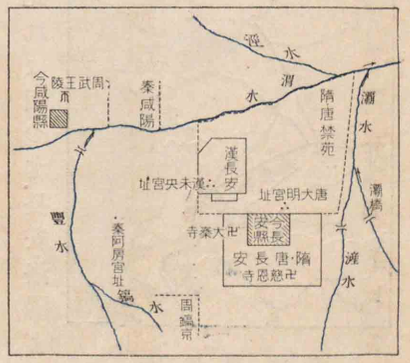
唐の太宗

宋の頃から支那と公に交通したが、推古天皇が隋に使を遣はし給うたことは特に有名である。

隋の末、兵を擧げた豪傑の一人を唐公李淵といふ。李淵の第二子李世民は不出世の英雄であつて、父を助けて群雄を平げ、天下を併せた。李淵帝位に卽き、國を唐と號し、長安に都した(六八一)。ついで位を世民に讓つた。李淵を高祖といひ、世民を太宗といふ。

長安城北門

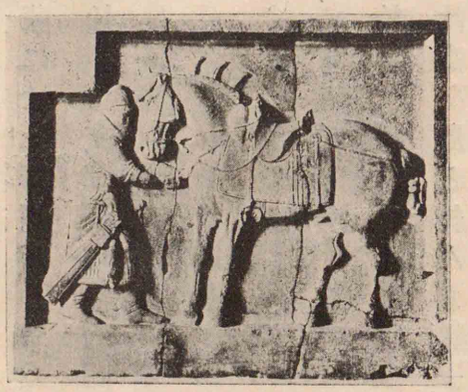
太宗は善く人を用ひたので文武の名臣雲の如く朝廷に滿ちた。彼は好んで臣下の諫めを聞いた。彼は兵を外國に用ひたけれども、一面民政に努力し、州縣官に適材を得ることと、裁判の公平を保つことに苦心した。彼は又儒學を尊び、教育を盛にし、大學



長安城

を擴張し、四夷の君長の子弟までも長安に來り學んだ。後人之を謳歌して貞觀の治といひ、秦漢以來、比無き治世と稱へた。貞觀は太宗の年號(六二七—六四九)である。

太宗は在位二十三年にして崩じたが、子高宗が善く太宗の業を繼いだので、唐の國勢は引續き盛大であつた。然るに、高宗の皇后武氏は、女ながら姦雄の資を懷き、高宗崩じて後、己の子なる中宗・睿宗を廢し、國を周と號して政を私すること十五年に及んだ。武氏年老いて病むに及び、中宗は再び位に卽き、唐王朝を恢復した(七〇五)。



太宗昭陵六駿圖(陝西省長安附近)

第八章　唐と諸外國との關係

唐の初、塞外に於いて雄を稱したのは突厥であつた。突厥は南北

東・西突厥

朝の末、阿爾泰山の麓に興り、今の内外蒙古から中央アジヤに亙る地域を支配したが、やがて東・西二部に分裂した。唐の創業の際に、東突厥の兵を借りたので、爾來厚く贈遺したが、東突厥は之に狎れて屢〻入寇し、長安の北、渭水の岸に來つたことさへあつた。因つて太宗は意を決し、李靖等をして大兵を率ゐて之を征服せしめた(六三〇)。西突厥は高宗の時に滅された(六七五)。

吐蕃其の他

今の青海の地には吐谷渾・黨項の二國、西藏には吐蕃國があつたが、いづれも太宗に服從した。西藏は此の時始めて支那と政治的關係を生じたのである。天山南路の諸國も亦太宗に歸服した。

子夜吳歌　李白

長安一片の月。　萬戸衣を擣つの聲。　秋風吹いて盡きず。
總べて是れ玉關の情。　何の日か胡虜を平げて、　良人遠征を罷めん。

新羅・百濟・高句麗

朝鮮半島に於いては、三國鼎立の勢を持續して居た。而して新羅と百濟と相爭ひ、百濟は日本に親附し、新羅は高句麗と結んだ。一方

唐の太宗は東突厥を滅して後、高句麗に弑逆の行はれたのを機として之を征伐したが、安市城(奉天省蓋平縣の東北)で喰止められ、糧食の盡きるのを恐れて遂に師を還した。しかし高宗は新羅を援けて先づ百濟を滅し、繼いで高句麗の内亂に乘じて、之をも擊ち滅した。百濟滅びて後、日本は其の遺衆を助けて唐の大軍と海陸に戰つたが、日本軍敗れ、百濟興復の計は水泡に歸した。而して高句麗・百濟の舊國土は悉く唐の版圖に入つた。

大唐平百濟塔
(朝鮮忠淸南道扶餘)

六都護府

唐の外國經略は着々成功し、其の領土は從來未だ曾つて有らざる大さと爲り、東は朝鮮より西は中央アジヤに至り、南は安南より北はシベリヤ南部に及んだので、朝廷は六都護府を設けて之を支配せしめた。六都護府とは安東(朝鮮)・安北(外蒙古)・單于(內蒙古)・北庭(天山北路)・安西(天山南路)・安南(印度支那)の其れをいふ。此の外、印度・シヤム・大食(アラビヤ)及び南海諸國

等も使を遣はして入貢した。日本も遣唐使及び留學生・留學僧を送り、其の文化の輸入に勉めた。

大食と海上交通

南方海上の交通は漢以來行はれたとはいへ、まだ盛でなかつたが、隋・唐の交、大食國勃興し、ササン朝を滅してペルシヤを取り、ペルシヤ灣の諸港を掌握するに及んで、其の國民は大に東南海上に活躍し、南洋諸島を經て、交州(東京)・廣州(廣東)・揚州(蘇江)等に來つて貿易し、海上通商の霸權を握つた。

第九章　唐の中期及び末期

玄宗

中宗位に復し、睿宗を經て玄宗に至る。玄宗精を勵まし、治を圖り、人民安堵し、文學・技藝も大に發達した。世に之を開元の治といふ。

安祿山の亂

然るに帝は末年政に倦み、奢侈に耽り、武備も弛んだので、范陽(北平)の節度使安祿山亂を作す(七五五)に及び、官軍頻に敗れ、洛陽・長安も守を失ひ、帝は蜀に奔つた。安祿山はもと北邊の商人であつたが、狡獪にして

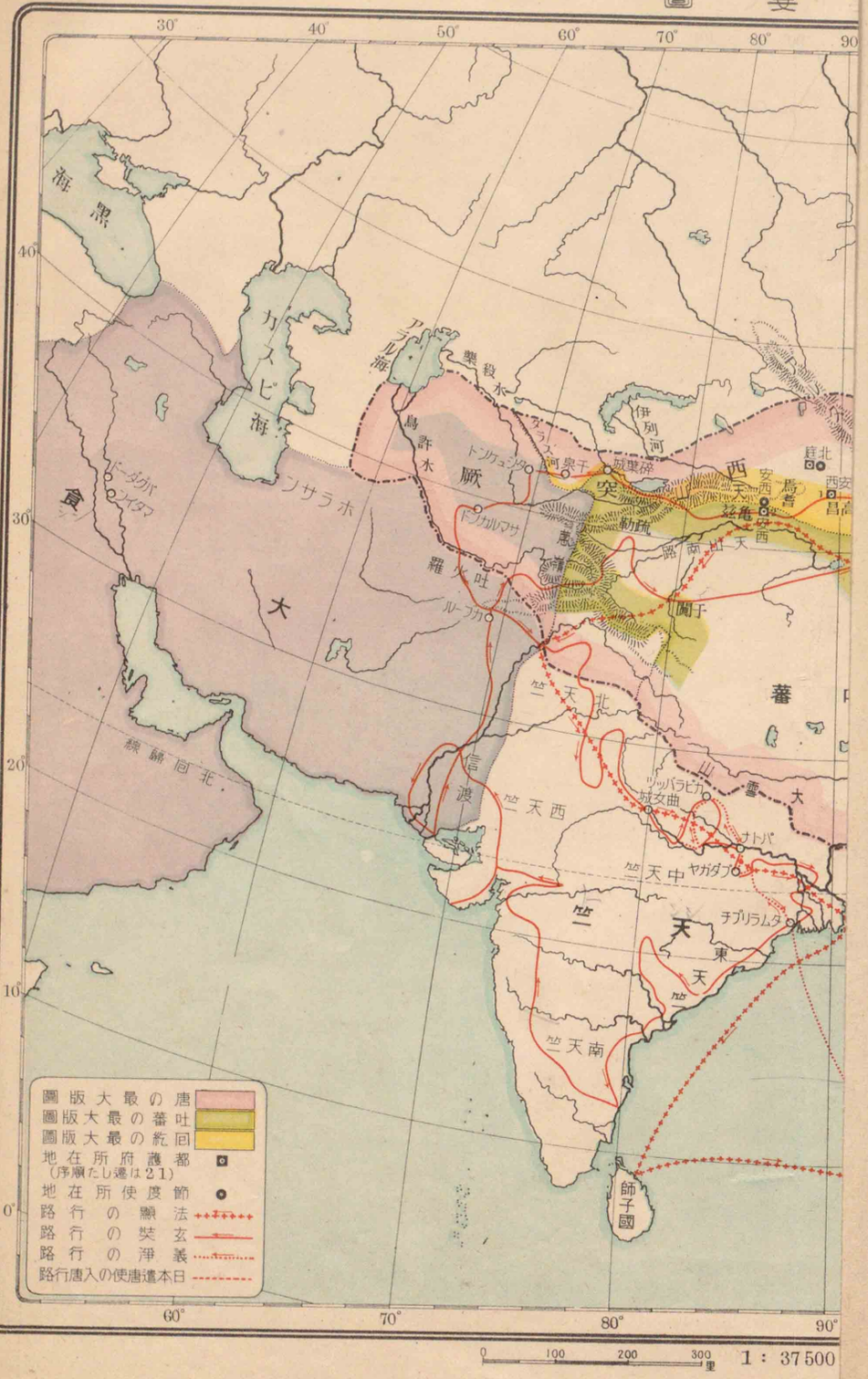
節度使

勇略あり、遂に節度使の榮職を占め、猶ほ慊らずして叛旗を飜したのである。此の叛亂は前後九年を經て、代宗(玄宗より三代目)の時に平定せられたが、唐の國威は是れより衰へた。

驪山溫泉（玄宗宴遊の地）

節度使は睿宗・玄宗の頃、外寇に備へる爲めに邊疆に設けられたものであるが、安祿山叛亂の後は內地にも頻に增設せられた。節度使は一地方に於ける文武の政を統べ、威權並び無きところから、動もすれば專橫に流れ、朝命に抗し、殆ど獨立國の觀を爲すものさへあつた。而して朝廷に於いては宦官跋扈の弊を生じた。此れは安祿山叛亂の後、宦官をして禁軍を掌らしめたのに因ることが多いのであるが、或は天子を弑し、或は恣に廢立を行ふに至つた。かくて唐は年と共に衰へ亂れ、第二十代哀帝の時、宣武の節度使朱全忠の爲めに國を簒はれた(七九〇)。高祖

唐の滅亡



の卽位より此に至るまで二百八十九年であつた。

第十章　唐代の制度・文化

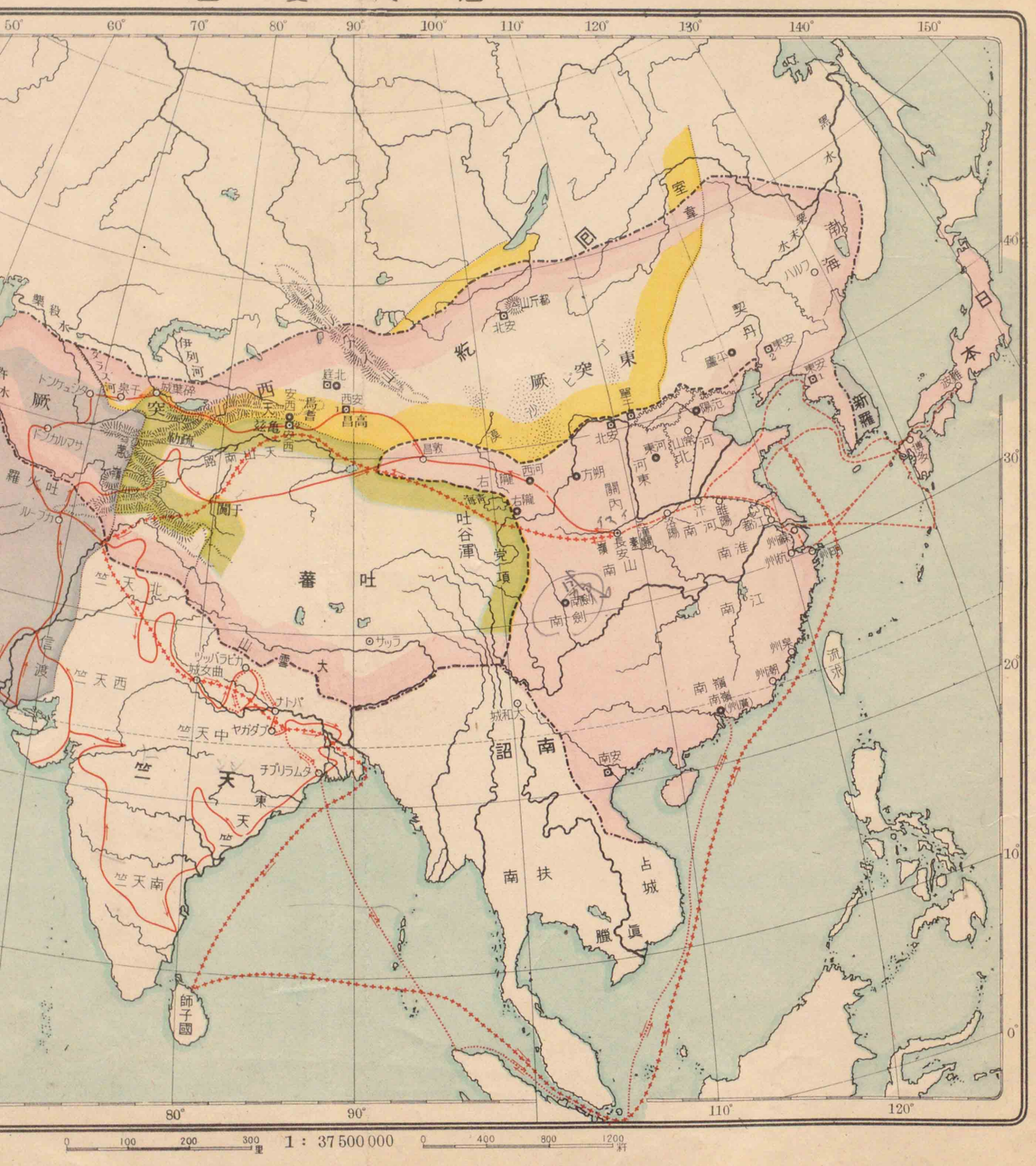
中央官制

唐の中央政府には、中書・門下・尚書の三省があつて政務を掌つた。中書省は詔勅を立案する處で、其の長官を中書令といひ、門下省は詔勅を審査する所で、其の長官を侍中といひ、而して尚書は其れを天下に施行する所で、其の長官を尚書令といひ、尚書令の下には吏・戶・禮・兵・刑・工の六部を置き、各部の長官を尚書と呼んだ。三省の制度は後漢以來徐々に發達し、唐に至つて大成せられたものである。此の外、御史臺といふものがあつて、官吏の監察を掌り、其の長官を御史大夫といつた。

地方官制

地方は先づ縣に分ち、縣令を置いて民を治めしめ、其の上に州を設け、刺史を長官として屬縣を統べしめた。玄宗の頃から、刺史の上に節度使若しくは觀察使を置き、少きは二三州、多きは十餘州を管し、文

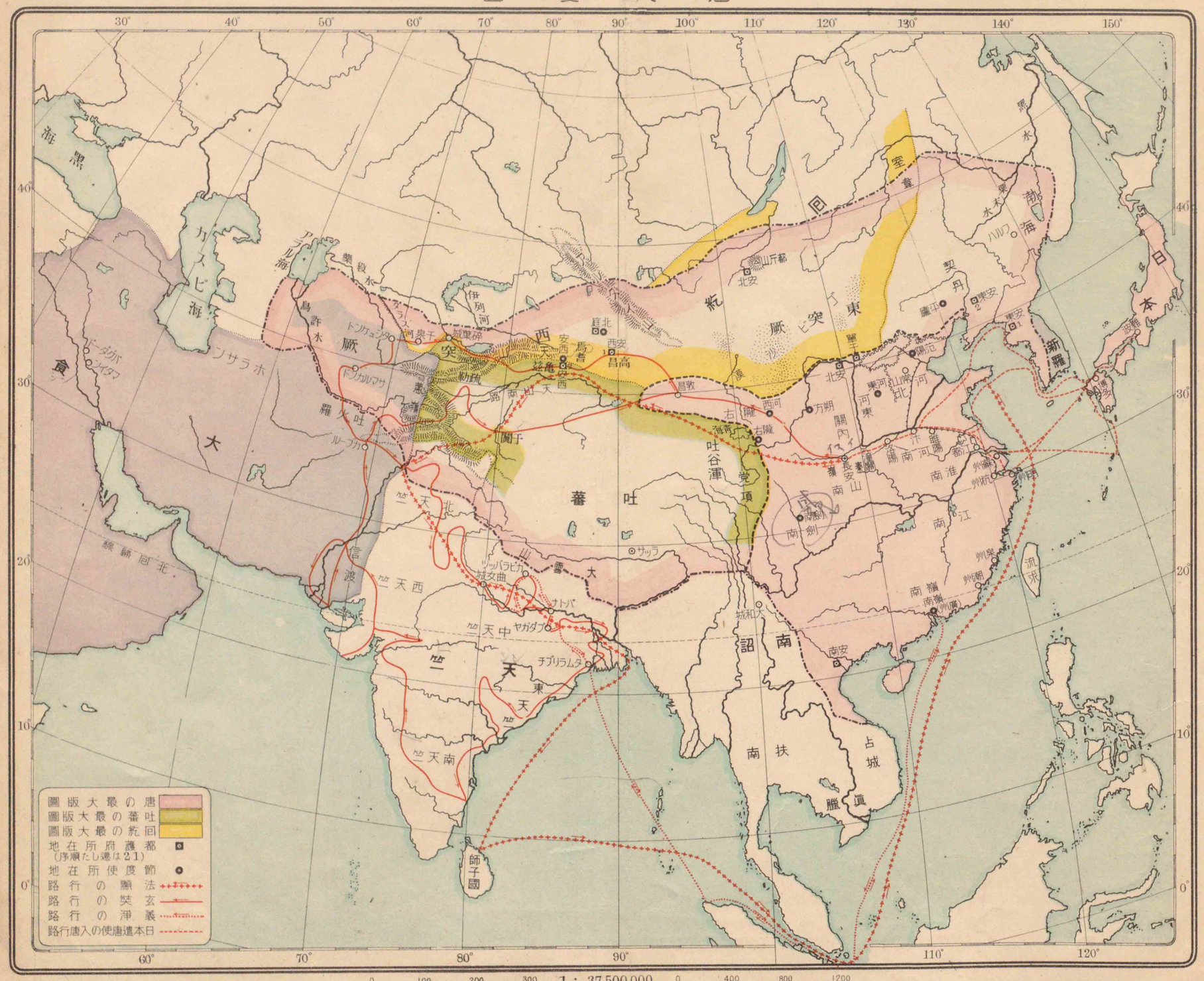
唐代要圖



地方官制

地方は先づ縣に分ち、縣令を置いて民を治めしめ、其の上に州を設け、刺史を長官として屬縣を統べしめた。玄宗の頃から、刺史の上に節度使若しくは觀察使を置き、少きは二三州、多きは十餘州を管し、文

唐代要圖


黑海
カスピ海
ペルシヤ
大食
ボクダッド
ファタワ
ペンサラホ
北回鶻線
ハザル海
烏許水
突厥
トンケュジョ
河泉子
城碎葉
ドンカルマサ
羅少吐
ルーブカ
勃疏
葱嶺
于闐
西突厥
庭北
西安
高昌
安西
龜茲
焉耆
昌敦
吐谷渾
党項
蕃吐
サッラ
ツッパラビカ
城女曲
ナトバ
ヤガダブ
チブリラムタ
天竺
東天竺
中天竺
西天竺
北天竺
南天竺
信度
師子國
雪山
大
城和大
詔南
南扶
占城
臘眞
南安
南詔
州廣
州潮
州泉
州福
州杭
州明
州越
州婺
州蘇
州揚
州楚
州鄂
州洪
州鼎
州荆
州襄
州鄧
州梁
州益
州成
州利
州綿
州劍
州閬
州梓
州遂
州合
州渝
州資
州簡
州眉
州嘉
州雅
州邛
州茂
州巂
州戎
州松
州扶
州文
州成
州岷
州鳳
州興
州洋
州梁

武の政を統べしめたことは、前にも說き及んだ如くである。而して節度使は主として武人であつた爲め、部下の武人を重用し、之をして地方行政に干與せしめ、又武人を刺史とする等のことが次第に盛に爲り、その結果唐末から五代へかけて、前後に類稀れなる武斷政治を出現するに至つた。

田制・稅法

他、井田法

唐の初、後魏の遺制を酌み、均田の法を定めた。卽ち十八歲以上の男子に田百畝を給し、八十畝を口分とし、二十畝を永業とし、口分は其の人死すれば官に還さしめることとし、年々一定の穀物及び布帛を租稅として納めしめ、又二十日の勞役に服せしめた。此の法は、社會の實情に適せず、從つて年と共に廢れ、安祿山叛亂の後には全く滅び、各人の土地・財產に應じて課稅する兩稅法が代はつて行はれた。

詩文

唐は經學若しくは詩賦を試みて官吏を任用したので、學問は前代に類無いほど普及した。而して經學は殆ど漢以來の訓詁の學を承け繼いだだけで、新しい發達を遂げなかつたが、詩と文章とは大に進

新疆出土唐代美人畫（大英博物館藏）

縦一尺七寸餘の横長の絹地に描かれたもので、室内装飾用に使はれたものである。
唐代開元前後の作と推定せられる。容貌・服装等は我が正倉院の頗黎人に類する。
樹下美人は以て居る。額に赤く點ぜられたのは花鈿で、頰の三日月形は花鈿を貼りつけたものである。化粧は靨粧を描いてある。

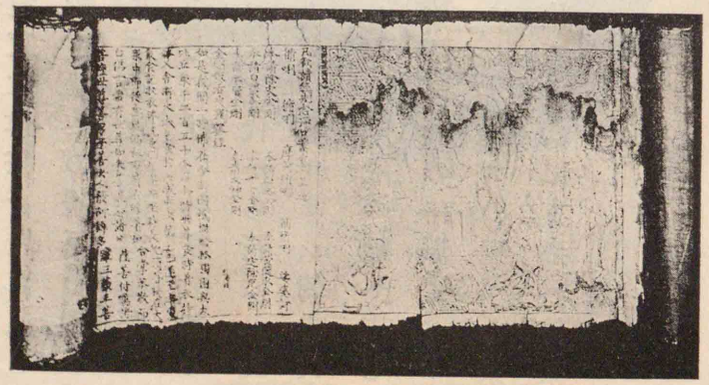
んだ。是れより先、南北朝時代の詩は主として形式の美を追ふに過ぎなかつたが、唐に至つて形式・内容ともに勝れ、個性を發揮した作品が現はれ、中にも李白の飄逸、杜甫の沈痛、白樂天の流麗など、いづれも千歳に獨歩するものであつた。文章に於いても韓愈・柳宗元等に依つて自由な表現法（之を古文といふ）が開かれた。書は士人の嗜みとする外、官吏に必要な技術として重んぜられたので、名手が多く出でたが、就中歐陽詢・顔眞卿などが著はれて居る。建築・彫刻・繪畫も亦發達した。此れには佛教の影響が多い。繪畫は從來主として人物を對象としたが、唐代に至つては山水畫も現はれた。吳道子は人物・山水往く所として可ならざるはなく、李思訓・王維は山

歐陽詢の書
（九成宮醴泉銘）

唐土偶

水の妙手として聞えた。此の外、染織・漆器・陶器等の工藝も亦頗る進歩した。

佛教は唐に入つて益〻弘通し、上下一般の人々に盛に信仰せられた。太宗の時、玄奘(げんじやう)は印度に赴いて經文を蒐集し、十七年を經て支那に還り、之を翻譯した。世人、玄奘の譯經を新譯といひ、從來の鳩摩羅什等の舊譯と區別した。義淨は又海路印度に赴いた。此く經文の輸入・翻譯せられた外、其の研究も頗る進み、



唐咸通九年佛經

唐代佛像顔面

（新疆省和闐出土——大英博物館藏）

道教

老子

西方宗教の傳來

杜順・法藏は華嚴宗を開き、善導は淨土教を、道宣は律宗をそれ〴〵大成した。道教は竊に佛教を取り入れて、宗教としての體系を調へつつ佛教と對抗した。武宗（九世紀）は道教を信じて、佛教を迫害した。

唐代の宗教では、道・佛二教が最も盛であつたが、此の外、祆教（ケン）卽ちペルシヤに古代から行はれたゾロアスター教、ササン朝時代にペルシヤ人摩尼（マニ）の唱へ出した摩尼教、基督教の一派でシリヤ人ネストリウスの唱へた景教、アラビヤのマホメットの唱へた回教も亦此の時代に支那へ傳來した。

大秦景教流行中國碑

（明末陝西省長安附近で發見せられたもの）

第三篇　近古

第一章　五代　宋の初期　遼

唐滅びて後、梁・唐・晉・漢・周の五朝が相繼いで興亡し、其の間五十餘年であつた。此れを五代といふ。周の宿將趙匡胤は兵士に擁せられ、周に代はつて帝位に登り、開封（河南）に都した（九六〇）。此れを宋の太祖といふ。梁以下五朝の領土は、黄河を挾んで、東は山東より西は甘肅東部に至る中原一帶で、其の他の地には蜀・楚・南唐・吳越・北漢・南漢等の諸國が割據して居たが、太祖及び二代目の太宗の時悉く之を平げ、統一の世に回した。太祖は節度使の制度を罷め、地方官には專ら文官を充てることとし、唐

宋太祖

遼

高麗

西夏

末五代の武斷政治の弊を一洗した。

五代から宋へかけて、塞外に遼國が興つた。遼は蒙古族で、もと契丹といひ、遼河の上流に據つて居たが、唐の末、耶律阿保機が王と爲つてより俄に強大と爲り、內外蒙古を併せ、滿洲に國した渤海を滅し、繼いで國を遼と號した。後四代を經て聖宗に至り、勢最も強く、宋を伐つて澶州に到り、宋の眞宗は親ら出でて之を拒ぎ、歲幣を約して和睦した。

乾統元年

契丹文字

是れより先、朝鮮半島では、新羅獨り存し、唐兵を逐うて大同江以南を領すること約二百年に及んだが、唐末に至り、國土分裂して、復た新羅・高麗・百濟の三國と爲り、高麗王王建といふもの五代の半ば過ぎに之を統一した。高麗は代々宋に朝貢して居たが、遼の聖宗に攻められ、宋に援けを請うて聽かれなかつたので、宋を棄てて遼に服屬した。

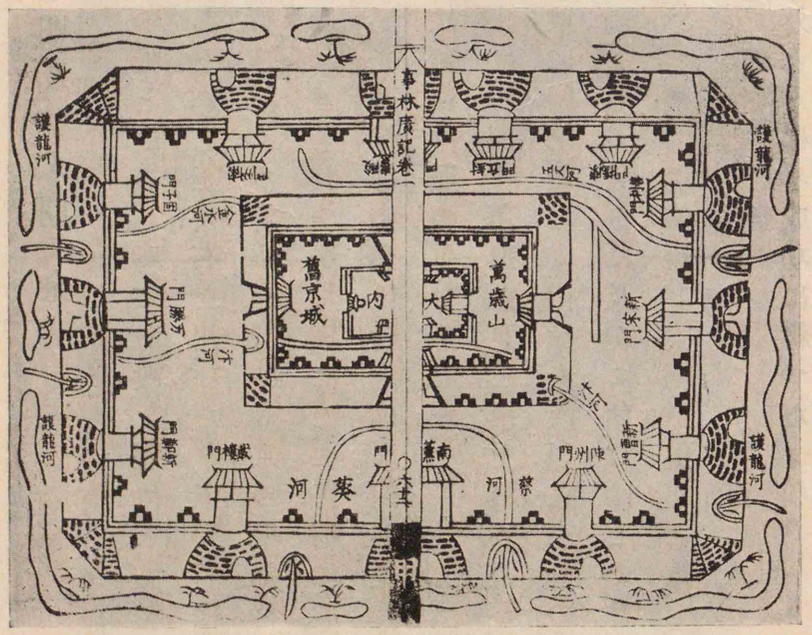
今の陝西・甘肅の北には、唐以來、黨項（西藏種）の一派が居住して居たが、

宋の仁宗（眞宗の子、四代目）の時、李元昊主と爲り、國を西夏と號して屢〻宋を侵した。仁宗之を拒ぐこと數年、歲賜を贈ることを約して互に兵を收めた。

此の如く宋は遼及び西夏とは間〻兵を交へたけれども、國內は太祖より仁宗に至るまで約百年の間平和うち續き、且つ政治は寬仁を旨とし、人口增加し產業榮え、都市は殷賑を極めた。

宋の國內の平和

汴京四面の城門の內、中央を除き、左右のものは一方に偏して造られて居る。此れは曲門と云ひ、我が國の桝形に似た構造であつた。



汴京圖

第二章　宋の中期及び末期　金

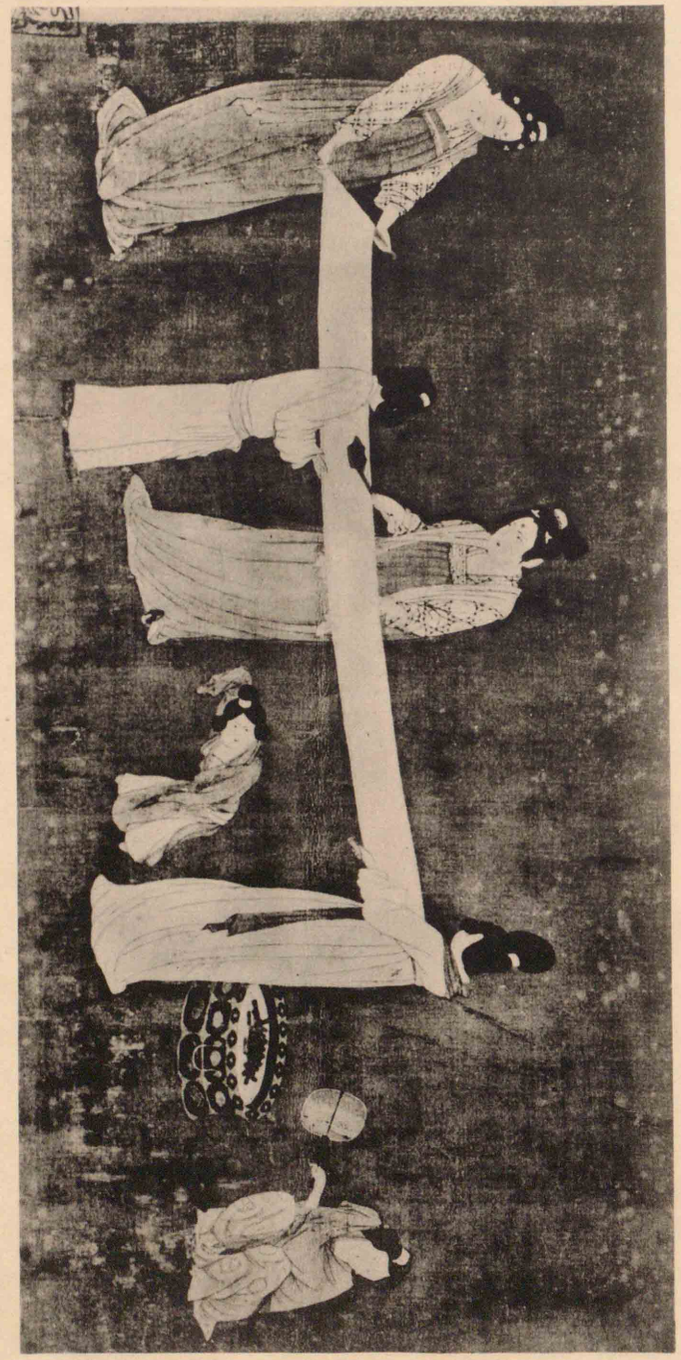
仁宗の後一代を經て神宗の世と爲る。神宗、財政を豐にして蠻夷を討ち懲らし、國威を恢復せんと志し、王安石を用ひた。王安石は青苗・市易等種々の新法を行ひ、歳入の增加を圖つたけれども、其の法煩瑣にして民情に副はず、司馬光・蘇軾等の名臣皆之に反對し、是れより新法・舊法兩派の爭を生じた。

神宗
王安石の新法

王安石

神宗の外國經營

神宗は一面吐蕃・遼・西夏と事を構へたが、概ね失敗に歸した。安南は秦漢以來、支那の郡縣であつたが、五代の末より獨立し、宋興るに及んで朝貢はしたけれども、既に支那の國土ではなかつた。神宗再び安南を獲んと欲し、其の準備を調へつゝあつたが、安南は之を覺つて反つて支那に入寇した。斯くして神宗の企は內・外ともに不成功に終つた。



（藏館術美ントスボ）圖練搗蹋張唐摹帝皇宗徽宋

、がるあがろことく捲を糸び及ろことろ縫き鎬を紐に牛一の前。るあでろことす覆を絹で疑火、で牛一の圖練搗はれ此つ貼をのもふいと鈿花の等裂・朱に額の子女時當。のもる足にふ寢を俗風の人婦流上代唐。たし愛割でのい狹が幅紙。る居でえ見がれ其もに人婦の圖。たしと飾で

宣仁太后

司馬光

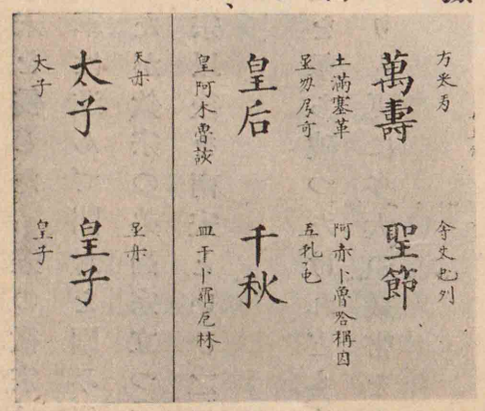
資治通鑑

神宗崩じて哲宗位を繼いだが、幼少の爲め、祖母宣仁太后（神宗の母）政を聽き、司馬光を用ひて悉く新法を除かしめた。宣仁太后は婦德高く、女中の堯舜と呼ばれた人である。哲宗に繼いで立つた徽宗は奢侈に耽り、土木を起し、國内の珍奇を集め、人民は爲めに過大の負擔を課せられて痛く苦しんだ。此の時、北の方滿洲に金といふ强國が現はれた。

金

金はもと女眞といひ、松花江の流域に據り、遼に屬して居たが、其の酋長阿骨打といふもの叛旗を飜し、遼の領土を蠶食して、自ら皇帝と稱し、國を金と號し、會寧（吉林）に都した。此れが金の太祖である。宋の徽宗は、此の事を聞いて使を金に遣はし、相結んで遼を夾擊した。宋軍は敗れ、金は獨力を以て遼を滅した。偶〻金の太祖崩じ、弟太宗位

遼の滅亡



女眞文字

南宋の高宗

を繼いだが、宋の興し易きを知り、大舉して宋を侵した。宋の徽宗は責を引いて位を其の子欽宗に讓つたが、金軍は進んで開封を圍み、徽宗・欽宗を虜にした。宋は殆ど滅びんとしたが、欽宗の弟高宗立つて都を臨安(江浙)に定め、淮水以南を保つた。高宗以後を南宋といひ、之に對して欽宗以前を北宋といふ。

高宗の時、金人屢〻入寇し、名將岳飛等が之を擊ち破つたけれども、宰相秦檜は和議を主張し、遂に遼に贈つたよりも更に多大の歳幣を金に與へることとして和睦した。

開封の陷落並に其の後うち續いた金の入寇に際して、金人は到る所殺戮・掠奪を恣にしたので、子は父に別れ、妻は夫に離れて逃げ惑ひ、目も當てられぬ有樣であつた。山谷林藪の間に隱れ、嬰兒の啼聲に因つて其れと知られる場合もあつたので、綿を圓めて丸を造り、嬰兒の口に含ませることが流行したといふ。我が國などで想像も及ばぬみじめさである。

高宗に繼ぎ立つた孝宗は江北の恢復を圖つて成らず、爾來心を內

金の滅亡

治に專らにした。此の時、金では世宗位に卽き、兩國とも明主時を同じうし、和平三十餘年に及んだ。孝宗崩じて後、宋は屢〻金を擊つて敗れたが、理宗(孝宗より四代目)の時、蒙古を助けて遂に金を滅した(一二三四)。而して幾もなく宋も亦蒙古に滅された(一二七九)。

第三章　宋代の文化

理學

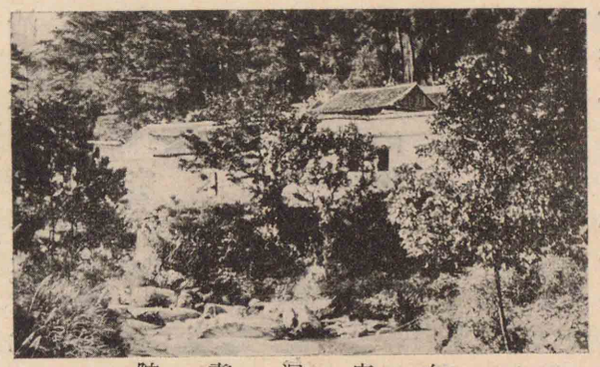
宋代に於いて儒學は一大躍進を遂げた。古典の字句解釋を事とした從來の學風を脫して、理論の研究に進み、宇宙の本體、人間の本質などを闡明することに勉め、古典も此の理論に立脚して說明することと爲つた。此れを理學・道學といひ、或は宋學ともいふ。周敦頤・程顥・程頤(以上北宋)・朱熹・陸九淵(以上南宋)等は其の代表的學者である。就中朱熹は宋學の大成者で、其の學說は朱子學と呼ばれる。

詩文

散文は唐の韓愈の唱へた古文が行はれ、歐陽修・蘇洵・蘇軾・蘇轍・黃庭堅(以上北宋)等が其の大家として鳴つた。蘇軾・蘇轍は蘇洵の子で、之を

併せて三蘇といふ。此の人々は兼ねて詩を善くしたが、詩人として
は蘇東坡（軾の號）・黄山谷（庭堅の號）が勝れ、外に陸游・楊萬里・范成大（いづれも南宋）等も
著はれて居る。宋の詩は唐の其れを凌ぐことは出來なかつたが、文
に於いては韓・柳以上の作家は出なかつたとはいへ、殆ど之に雁行す
るものが多く現はれ、大體から見て、文は宋に
至つて一層進んだといひ得る。

教育の進歩したことも宋代の一特色であ
る。仁宗の時、天下の各州縣に令して、學校を
建て學官を置いて多くの生徒を養はしめ、是
れより學校教育が興隆した。しかし教育の
中堅はむしろ書院であつた。書院は私立の
學校で、宋一代を通じて盛に設けられ、有名な
白鹿洞書院（江西廬山省）の如きは學徒數千人に及
んだといふ。理學・文藝の發達が、教育の興隆



白鹿洞書院

に負ふこと多きはいふまでもない。

印刷

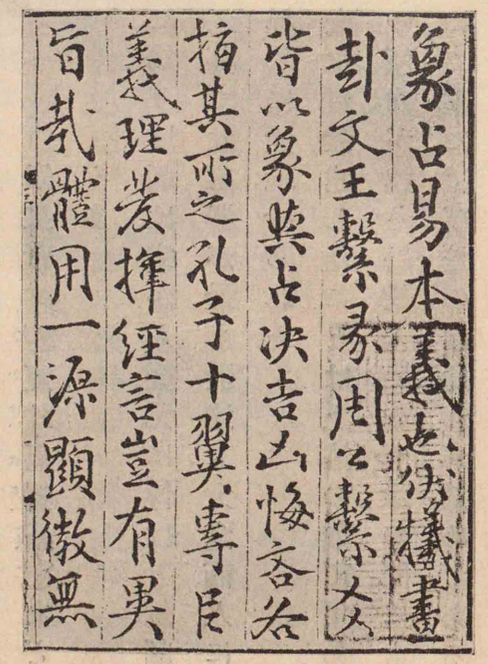
宋代では又木版印刷が盛に爲つた。印刷の術は隋の頃から起つたが、其れが大に發達し、經史百家の書が數多く印刷せられ、容易に買ひ求められるやうに爲つたのは、宋代の事である。是れは文化の隆昌を促した最も力強い要素であつた。

宗教

宗教としては佛教・道教が流行し、唐代に西アジヤから入り來つた諸宗教は衰へた。佛教の中では禪宗が盛で、儒者も多く之を研究した。大藏經が始めて出版せられたのも、此の時代（太宗の時）であつた。

繪畫

美術では繪畫の進歩が著しい。花鳥畫は五代に興り、宋に入つて



宋版印刷（朱熹の書）

演劇其の他

宋の文弱の弊

尙ほ音樂・演劇の類も盛に爲り、演劇は宋から金・元に傳はり、雜劇の名を以て著はれて居る。工藝では磁器が最も發達し、大食商人に依つて西方に輸出せられ、世界的に愛玩せられた。

宋代に於いて各方面の文化が發達したことは上述の如くであるが、同時に文弱の風、享樂的の傾向が起り、一般人民や軍隊の間にも浸潤した。北狄に壓迫せられて遂に滅びたのは、此れが爲めである。

見るべきものと爲り、山水畫も此の時代に發達した。墨畫が發達し、減筆畫が發達し、而して寫生が精妙を極めると共に、一面理想を含蓄せしめるやうにも爲つた。

宗徽の畫

名手としては董源・李龍眠・米芾・徽宗皇帝(以上北宋)・夏珪・馬遠(以上南宋)など頗る多い。

成吉思汗

第四章　蒙古の世界經略

蒙古は外蒙古オノン河の源、ブルハン山の邊に遊牧した部族で、初、金に服從して居たが、鐵木眞が其の君と爲るに及んで俄に勃興した。

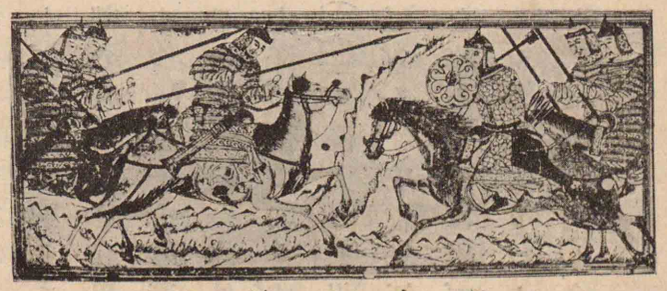
成吉思汗

鐵木眞の父は他部の人に殺され、母は具に艱難を嘗めつゝ諸子を教養した。鐵木眞長じて英武絕倫、內外蒙古を統一して大汗の位に卽き、成吉思汗と號した(一一〇六)。後、元の太祖といふは此の人である。成吉思汗は繼いで西夏を降し、金を破り、又四子と共に大軍を率ゐて西に出で、中央アジヤを擊ち從へ、別に一隊を遣はしてペルシヤの北よりコーカサス山を越えてロシアの諸國を破らしめた。かくて軍を回し、金を滅さんと六盤山(甘肅東南)の南に到り、疾を得て崩じた(一二二七)。

太宗

蒙古では、大事に際しては、クリルタイといふ大會議を開いて之を決する習はしがあつたので、太祖崩ずるや、此の會議を催し、其の子窩闊台（オゴタイ）を立てて大汗とした。此れを太宗といふ。太宗は先づ宋と謀を通じて金を滅した。ついで都をカラコルム（外蒙古オルコン河畔）に建て、又クリルタイを開いて遠征を議し、一軍は道を分つて宋を伐ち、一軍は高麗を攻め、一軍は遠西諸國を伐つことに決した。遠西征伐の總大將は拔都（バツ）（太祖の孫）であつたが、彼はロシヤを蹂躪してポーランド・ホンガリヤに出で、イタリヤに迫り、到る所歐人を破ること前後六年、太宗の訃（ふ）に接して軍を回した（一二四一）。而して彼自らはアラル海の北より黑海に至る地に欽察（キプチヤク）汗國を建てて、留まり鎭した。他の二軍もそれぞれ效果を擧げた。

拔都の西征



蒙古の騎士

憲宗

太宗の後、定宗を經て憲宗（太祖の孫）に至る。憲宗の時、復た大會議に謀つて征伐の師を起し、皇弟忽必烈（クビライ）は大理（雲南）を攻め、同旭烈兀（フラグ）はペルシヤ・アラビヤ等を攻め、也古（エグ）（太祖の姪）は高麗を征した。大理・高麗は全く蒙古に降り、旭烈兀はペルシヤ地方を平げて伊兒（イル）汗國を建てた。憲宗は更に忽必烈等と共に宋を滅さんと蜀に到つたが、疾を得て崩じた。忽必烈代はつて位に卽き（一二六〇）、都を大都（北京）に遷し、國號を立てて元と稱した。此れを元の世祖といふ。

忽必烈

世祖

成吉思汗以來蒙古族の活動は實に偉大であつて、歐・亞二大陸に亙つて縱橫に大版圖を開いた。此れは成吉思汗其の人のあらゆる國々を征服し盡さんとする英雄的願望に本づいたといつてよい。しかし此の願望は必ずしも彼が個人的功名心から起つたのではない。彼は諸國を征服して祖先の名を輝かし、同時に其の子弟一族に廣大なる領土を分ち與へ、又一面諸國の紛爭を杜絕して平和を來さんと欲し、六十六年の

生涯を馬上に送つた。而して一族子弟並びに部民は彼の意氣に感じ、彼の志を繼いで征戰を續け、本文に述べたやうな成績を擧げたのであつた。

第五章　元

元、宋を滅す

元の世祖は先づ大擧して宋を攻め、臨安を陷れた。宋の義士文天祥・張世傑等恢復を圖つて成らず、幼帝、厓山(廣東)に於いて海に投じ、宋室は全く滅びた(一二七九)。

日本を伐つで敗る

順聖は世祖の皇后、明敏にして同情に富み、内助の功が多かつたと傳へられる。

順聖皇后

世祖は日本を從へんと企て、先づ高麗を介して書を送り、ついで屢使を遣はし、日本の斷乎として之を斥くるに及び、蒙古・高麗の軍十餘萬人をして筑紫に入寇せしめたが、反つて大に敗れた(一二八一弘安四年)。歐亞の諸國で蒙古の大軍を破つて其の獨立を全うしたものは、唯日本のみであつた。

南方の征服

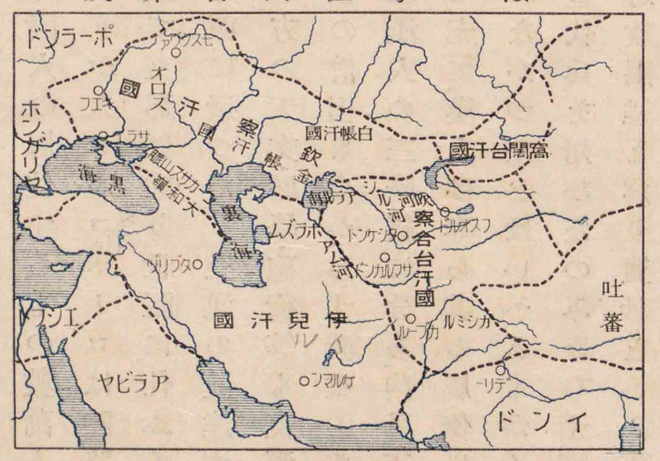
世祖は轉じて緬國(ビルマ)・安南(安南の南)・占城(チヤンパ)・ジャヴァを伐つて之を降し、自餘の南方諸國は風

を望んで降伏した。

大帝國の完成と分裂

世祖の治世は蒙古隆盛の絶頂であつた。太祖以後八十年にして、其の遺業は殆ど完成せられ、歐亞に誇る空前絶後の大帝國が出現した。しかし完成と同時に分裂が始まつた。其の大領土の中、世祖に直屬したのは支那・内外蒙古・滿洲・西藏等の地で、其の餘は、太祖の第二子察合台(チヤガタイ)の後なる察合台汗國(中央アジヤ)、太祖の第三子太宗の後なる窩闊台(オゴタイ)汗國(外蒙古の西部)及び欽察汗國・伊兒汗國の四汗國に分れて居たが、太宗の孫海都(ハイドゥ)といふもの、欽察汗・察合台汗を語らつて本朝に反抗し、世祖も身を終るまで之を如何ともすることが出來なかつた。後海都死し、諸汗國は元朝に恭順の意を表したが、しかし實際は獨立

四汗國

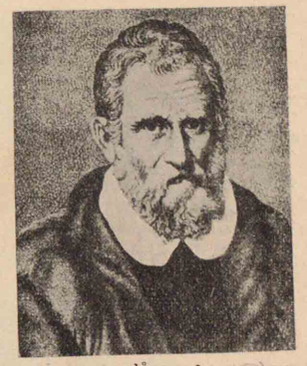


元の四汗國圖

國に異ならなかつた。

交通の發達

蒙古の大帝國がともかくも建設せられた爲め、東アジヤと西アジヤ及びヨーロッパとの交通は海・陸ともに大に發達した。杭州(浙江)・泉州(福建)・廣州(廣東)等には外國商船多く來航し、外國人の居住するもの數萬人に及んだ。イタリヤ人マルコ・ポーロは陸路中央アジヤを經て支那に來り、世祖に仕ふること十七年、海路西に還つた。交通の發達するに伴なつて西方の天文・曆學・砲術等も支那に傳はり、基督教の僧侶も少からず渡來した。



マルコ・ポーロ

元の三階級

元朝は領土内の住民を蒙古・色目(西域人)・漢人の三階級に分ち、内外百官の長は蒙古若しくは色目を以て之に充て、漢人は專ら其の屬僚に充てることとし、其れが徹底的に行はれなかつたとはいへ、ともかくも漢人を最下級として抑壓した。又歷代兵を用ひたのみならず、喇嘛教を尊んで法事に財を費した爲め、財政困難と爲り、寶鈔といふ紙

元代要圖

元
最大版圖
征西の汗思吉成路
征西の都拔路
寇侵本日の軍元路
旅行方東のローボコルマ路
察合台汗國
窩闊台汗國
欽察
ホラズム
伊兒
吐蕃
ドンイ
(思都欣)
古蒙
西夏
雲南
交趾
安南
占城
ラオス
ムヤシ
眞臘
ペグー
マルビ
マラカ
スマトラ
ジャワ
オネルボ
高麗
日本
玄界島
筑前
筑紫
1:1875000
1:43750000

元代要圖

元
圖版大最の元
路征西の汗思吉成
路征西の都拔
路寇侵本日の軍元
路行旅方東のローポコルマ
元寇要圖
1:1875000
1:43750000
文永の役(一二七四)元軍の進路
弘安の役(一二八一)元軍の進路
ヤビラア(万天)
ドンイ(思都欣)
ヤガホ
ヤ國
ドンラーポ
ツイド
ヤジア小
シリヤ
ホラズム
カスピ海
黒海
察合台汗國
欽察汗國
伊兒汗國
ジャガタイ
ウイグル
吐蕃
西夏
蒙古
高麗
日本
ビルマ
ラオス
ムヤシ
安南
占城
オネルボ
ジャワ
スマトラ
マラカ
ペグー
雲南
玄界灘
壱岐
筑前
筑紫
肥前
馬對
軍南江
軍東路
軍南江

紙幣

元の滅亡

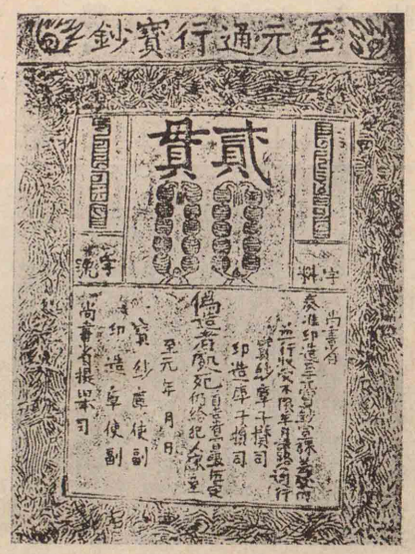
明の太祖

幣を濫發し、經濟界の混亂を來した。紙幣は北宋時代から存したが、元に至つて特に盛に用ひられたのである。かくて支那人民の不平は、順帝（世祖より十一代目）の時に至つて爆發し、騷亂四方に起り、やがて元の滅亡を來した（一三六八）。

第六章　明の初期

帖木兒

元の末に蜂起した叛徒の一人に朱元璋といふものがあつた。彼はもと窮して僧と爲つたものであるが、金陵（今の南京）に據つて附近の豪傑を擊ち從へ、帝位に登つた（一三六八）。此れを明の太祖といふ。太祖は即位の年、將を遣はして大都を襲はしめ、順帝を蒙古に逐うて元朝を倒した。元は世祖の宋を滅してより此に至るまで約九十年を經た。



至元寶鈔

惠帝

朱元璋

かく、事に託して功臣を誅し、而して子弟を封じて王とし、帝室の安固を期した。太祖に繼ぎ立つた惠帝（太祖の孫）は諸王の勢過大なるを憂ひて之を弱めんとしたところ、かねて異國を抱ける叔父燕王棣は兵を擧げて叛し、金陵を陷れ、惠帝は亂軍の中に焚死した。燕王位に卽く。此れを成祖といふ。俗に永樂帝ともいふのは其の年號に因んだのである。ついでにいふ、明の太祖以來、天子一代に年號一つの習はしと爲り、清朝の末まで續いた。其れ故、便宜上年號を以て天子を呼ぶやうにも爲つた。

太祖人と爲り疑ぶ

太祖はついで內蒙古及び滿洲を併せ、又四川・雲南の地を平げて、統一の業を遂げた。

明太祖陵前の石人

成祖の經營

成祖は都を北平に遷して之を北京といひ、金陵を南京と改めた。

成祖

彼の行が道德上許し難いことはいふまでもないが、しかし彼も亦人傑であつた。彼は安南を擊つて其の地を取り、宦官鄭和等に命じ、水軍を率ゐて南洋諸國を威服せしめ、鄭和は遠くアフリカ東岸まで赴いた。彼は更に韃靼（蒙古東部）・瓦剌（蒙古西部）を親征して之を屈伏せしめた。

帖木兒

蒙古の四汗國は元末には、或は滅び或は衰へ亂れたが、其の時察合台汗國（中央アジヤ）から一人の英雄が現はれた。此れを帖木兒といふ。

業を恢復せんと欲し、成祖の初年、大軍を率ゐて東に向つたので、成祖も之を聞いて備を嚴にしたが、帖木兒は疾を得て途に斃れ、兩雄の衝突を見ずして已んだ。帖木兒の死後、其の領土は瓦解した。

帖木兒

帖木兒は蒙古王族の後であるが、察合台汗國の分裂に乘じて之を取り、都をサマルカンドに定め、ついで伊兒汗國・欽察汗國を併せ、印度を侵しオットマントルコをも擊ち破つた。而して明を滅して祖

第七章　明の中期及び末期

明の極盛期

成祖より一代を經て宣宗に至る。宣宗は善く祖宗の遺烈を繼いだ。太祖より宣宗に至るまでが、明の極盛期であつた。

英宗

宣宗の子英宗は宦官を信任したので、是れより宦官專横の弊を生

憲宗
孝宗

じた。英宗は又瓦剌を親征して反つて擒にせられたが、太后が名臣于謙の言を用ひて善く敵を拒いだので、瓦剌は和を講じ、英宗を送り還した。英宗の子憲宗及び憲宗の子孝宗の二代は、宣宗時代に次いでの治世であつたが、其の後、北は韃靼に攻められ、南には倭寇がうち續き、國勢次第に衰へた。

倭寇

是れより先、日本が蒙古の遠征軍を鏖にして後、國民の志氣大に奮ひ起ち、海を渡つて貿易を營むもの多く、浮浪の徒は海賊と爲つて高麗及び元の沿岸を侵掠したが、支那の不逞の徒にして之に加盟するものも多かつた。彼等の活動は明代に入つて特に烈しく爲つた。倭寇とは明人が此の海賊を指していつた語である。倭寇は勇敢にして向ふ所敵無く、數十人の衆を以て無人の地を行くが如く、沿海の地を荒し、北は渤海より南は南洋に及んだ。

朝鮮

朝鮮半島では、明の初に高麗の將李成桂といふもの、倭寇を伐つて功を立て、遂に王位を簒ひ、國を朝鮮と號し、明の封冊を受けて其の屬

元 倪雲林筆岩居圖
（北平古物陳列所藏）

邦となつた。後八世を經て宣祖に至る。此の時、日本に豐臣秀吉出で、國威を海外に耀かさんと欲し、朝鮮に命ずるに日本軍を導いて明に入ることを以てし、宣祖之を拒むに及んで、兵を出して先づ朝鮮を伐つた。朝鮮は一たまりも無く敗れ、宣祖其の都京城を棄てて北の方義州に奔り、明の神宗（孝宗より五代目）は大軍を派して之を救はんとし、反つて敗北した。

明は朝鮮役の後、財政の窮乏を救ふ爲め租稅を增したので、民苦しみに堪へずして流賊と爲るものが多く、同時に滿洲人は北から起つて明の邊境を侵略した。而して毅宗（神宗より四代目）に至つて、明は遂に滅亡した（一六四四）。

明の衰亡

元・明の文化

元から明へかけて朱子學が流行したが、明の孝宗の頃王守仁（號は陽明）出でて、いはゆる陽明學を唱へ、儒學に新生面を開いた。文學では元・明に亙つて戲曲及び口語體小說が發達した。有名な水滸傳（すいこでん）は明の初に、西遊記は明の末に著はされたものである。繪畫は元末に黃大癡（たいち）。

倪(雲林)・吳(仲圭)・王(叔明)の四大家が出で、山水畫をして殆ど進歩の極地に達せしめた。明代にも沈石田・唐寅・仇英等多くの名手が輩出した。

第八章　歐人の東漸

歐人東漸の由來

歐洲に於いては十二三世紀(南宋時代)に亙り、十字軍が起されて、基督教諸國の聯合軍が屢〻小アジヤに到り、ついで蒙古人の數回の侵入があつたことなどに因つて、アジヤとの關係が稍〻密接と爲り、同時に航海の術進み、冒險敢爲の風起り、十五世紀の末(明の中頃)には、大西洋を經て、印度に航せんとするものが陸續として現はれた。かくて一四八六年にはポルトガル人バーソロミュー=ヂヤズは、アフリカの南端なる喜望峰に達し、一四九二年にはイタリヤ人コロンブス印度に赴かんとして、反つてアメリカ東方の諸島を發見し、一四九八年にはポルトガル人ヴァスコ=ダ=ガマ喜望峰を廻つて印度に到着した。此の後ポルトガル人は政府の保護を受けて多く印度に赴き、ゴア(印度西海岸)を略して根據

ポルトガル人チヤズ

地とし、マラッカ・ジャヴァを取り、一五一七年（明の武宗の時）には支那の廣州（廣東）に來り、ついで日本にも來り、爾來百餘年の間、東洋貿易の霸權を握つた。

スペイン人

スペインも早くから航海・通商に努力したが、一五六五年（明の世宗の時）フィリッピン群島を占領し、マニラの都市を建てて根據地とし、日本・支那に通商した。

オランダ人

オランダはもとスペインの屬國であつたが、明の神宗の時獨立してより海外發展に努め、ポルトガル人・スペイン人を逐うてジャヴァ・スマトラ等を奪ひ、ジャヴァにバタヴィヤ市を建て（一六一九、神宗の時）、進んで臺灣を占領し、支那・日本と貿易を營んだ。イギリス人も亦神宗の時、始めて印度に赴き、南洋・支那にも通商した。

マテオ＝リッチ

基督教

歐洲商人についで、基督教の宣教師も東洋に來つて布教した。イタリヤ人マテオ＝リッチ（利瑪竇）は最初に支那に來り、明の神宗の許可を得て、北京に教會堂を建てたので、最も著はれて居る。

第四篇　近　世

第一章　清の興隆

清の太祖

明の神宗の時、滿洲族の酋長努爾哈齊（ヌルハチ）といふもの、興京より起つて今の滿洲の大部分を併せ、國を後金と號した（一六一六）。此れを清の太祖といふ。後金の名は、宋代の金國と同民族であるが爲めに選ばれたのである。ついで太祖は明の大軍を迎へ擊つて之を破り、瀋陽（奉天）・遼陽等を取り、瀋陽に都した。太祖の子太宗の時、內蒙古を服し、朝鮮を從へ、又頻に明を侵して北京朝廷を震駭（しんがい）せしめ、明の大將の來り降るものも少くなかつた。皇帝と稱し、國號を清と改めたのは此の時であつた（一六三六）。

太祖努爾哈齊

順治帝

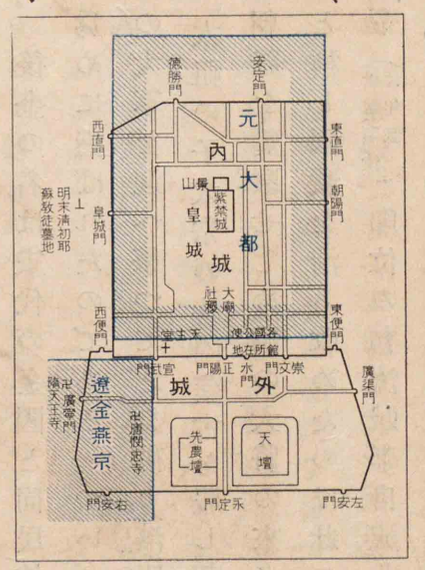
太宗の子順治帝（世祖、順治は年號）卽位の初、流賊李自成北

康熙帝

京を陷れ、明の毅宗自殺し、明室は滅亡に歸したが、帝は之を聞いて、賊を擊ち破り、北京に入つて茲に都を遷し(一六四四)、辮髮の令を下し、人民をして之に從ふことに依つて恭順の意を表せしめた。ついで兵を派して南方を從へしめ、南京・福建等に據つた明の諸王を滅し、十餘年にして悉く國内を平定した。

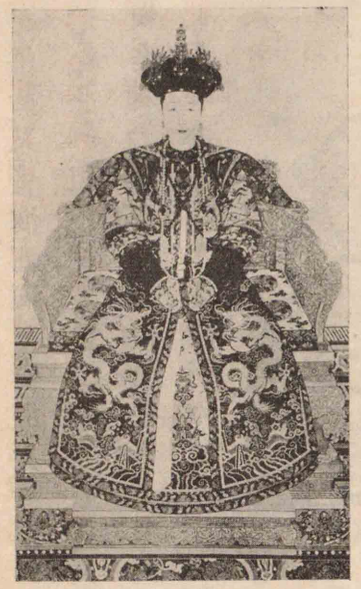
聖祖康熙帝

順治帝の次を康熙帝(聖祖)といふ。帝は文武の大才を懷き、類稀れなる英主であつた。帝は明の降將にしてそれ〴〵雲南・廣東・福建の王に封ぜられた吳三桂外二人の叛亂を平げて、統一の業を固くした(一六八一)。嚮に蘭人を逐うて臺灣に據つ



北京圖

て居た明の遺臣鄭成功の孫、克塽を降して此の島を領土に加へた(一六八三)。シベリヤを占領して滿洲の北邊に迫つたロシヤ人を擊ち退け、ネルチンスク條約を結んで、外興安嶺以南の地を保全した(一六八九)。是れより先、瓦剌の後なる準噶爾部は伊犁に據つて居たが、噶爾丹其の首長と爲るに及んで、青海・西藏・天山南路を從へ、又外蒙古を取り、進んで内蒙古に迫つた。因つて康熙帝は親征して噶爾丹を擊ち破り(一六九六)、外蒙古

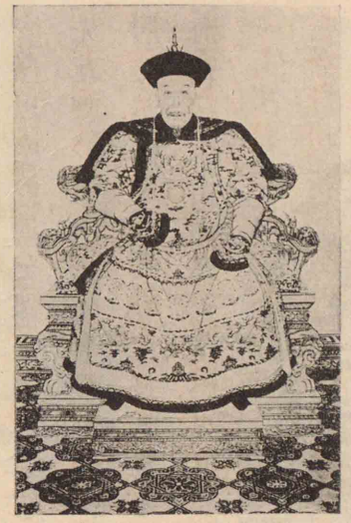


聖祖皇后

蘭人鄭成功に降る

雍正帝
乾隆帝

を併せ、又青海・西藏をも服從せしめた。帝は此く武功を立てた外、內治を整へ、租稅制度を改革して將來人民の負擔を輕うするやうにし、又各種の學藝を奬勵し、學者を集めて有益なる辭書其の他を編纂せしめるなど、其の施設極めて見るべく、文武の功業、漢・唐をも凌がんとした。帝は在位六十一年、壽六十九高にして崩じた。


高宗乾隆帝

康熙帝の後、子雍世帝(世宗)を經て乾隆帝(高宗)に至る。乾隆帝も亦英邁の君で、祖父の業を繼ぎ、準噶爾部の餘黨を平げて天山南北路を併せ、又ビルマ・シャム・安南を屬國とし、一面大に學術を奬勵し、有名なる四庫全書を蒐集した。康熙・雍正・乾隆三帝の治世百三十餘年の間が清國の極盛時代であつた。

中央官制

第二章　清代の制度及び學術

清朝の制度は明の制度を承け繼いで、之に若干の修正を加へたものであつた。中央政府の主要なる官署は、內閣と吏・戶・禮・兵・刑・工の六部及び理藩院とであつた。內閣には大學士が置かれ、天子の諮問に應じて政務を議定し、六部及び理藩院には尙書(長官)・侍郎(次官)以下の官が置かれ、六部は支那本部及び滿洲に關する政務の執行に當り、理藩院は內外蒙古・天山南北路・青海・西藏の政務を統べた。此の外、監察機關として都察院が設けられた。中央の各官職には概ね滿洲人と漢人とが併用せられ、使へば內閣大學士は滿・漢各二人、六部尙書は滿・漢各一人と定められて居た。以上は大體國初の制度であるが、雍正帝の時軍機處を置き、軍機大臣を任命して文武の機務を掌らしめて以來、政務議定の實權は內閣を去つて軍機處に移つた。

滿・漢併用の制には、將來漢人の勢力の過大と爲るのを豫防せんとする意

圖も含まれて居たであらう。しかし、それにしても國初滿洲人全盛の際、中央政府に於ける重要地位の一半を漢人に分ち與へたのは頗る寛大であつたといはねばならぬ。總じて清朝の支那統治の方法は、元代のそれに比して寛大公平であつた。

地方官制

支那本部は十八省に、滿洲は三省に分たれ、而して省は府に、府は州・縣に分たれた。府・州・縣には知府・知州・知縣があつて行政を掌り、省には巡撫があつて之を統べ、又二三省毎に總督があつて之を總轄した。地方官には、滿・漢併用の制は適用せられなかつた。

清代の學術

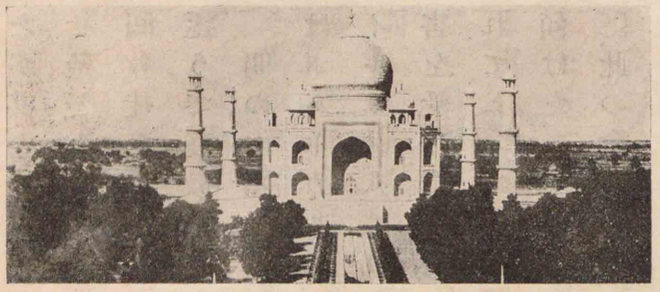
清代の學術の特色は考證的學風である。考證とは、空理を避け、證據を求めて立論研究するをいふ。明の遺臣顧炎武考證に長じ、之に依つて經學・史學等を研究してより此の學風大に起り、殆ど天下を風靡した。康熙・乾隆二帝が學術を奬勵するに及んで、學者輩出し、經史の外、文學・音韻・金石・地理等の學が發達したが、其の研究方法は考證を主とし、今日の科學的研究に近いものであつた。清朝の考證學は先

秦百家の學、隋唐の佛學、宋・明の理學と共に支那學術の精華であつた。

第三章　ムガル帝國　英人の印度侵略

バベル

ムガル帝國



タージマハール

（アグラ城外に在り、世界最大の美建築と稱せられる）

帖木兒五世の孫をバベルといふ。彼は父祖の失つた中央アジヤの地を恢復せんとして成らず、轉じて印度に侵入した。當時印度にはデルヒにロヂ王朝があつたが力弱く、ヒンヅー教（婆羅門教）徒と回教徒とが各地に割據して爭つて居たので、バベルは之に乘じて印度の中部以北を平定し、ムガル帝國を興した（一五二六、明の世宗の時）。ムガルはモンゴル（蒙古）の轉訛である。バベルの孫アクバル（一五五六、即位）はヒンヅー教徒を利用して回教徒を抑へ、國威益盛と爲つた。但しアクバルの時までは其の領土はヴィンドヤ山脈以北に限られ

たが、其の後二代を經てアウラングゼブに至る間に於いて南方を併せ、殆ど全印度を統一した。然るにアウラングゼブは回教を信じ、非回教徒を壓迫したので叛亂復た起り、其の死（一七〇七、康熙四十六年）後、帝國は年を逐うて衰微した。

英人と印度通商

明の中頃より以後、東洋に進出した歐洲人の中、初に霸を稱したのはポルトガル人であつたが、明末以來はオランダ人が優勢と爲つた。イギリス人は立ち後れの姿で、到る所ポルトガル人・オランダ人の妨害を受けた。特にアンボイナ島（南洋）に於いてオランダ人に虐殺せられて（一六二三、明の熹宗の時）後は、之と鋒を爭ひがたきを知り、印度の通商に力を傾けた。英人は初、東洋貿易の機關として東印度會社を設けたが（六一〇〇）、此の會社は主として印度經營に從事することと爲つた。當時フランス人も東印度會社を興し、印度に根據地を置いて居たので、兩國人は自ら勢力を競ひ、遂に戰端を開いたが、もと英國東印度會社の書記であつたクライヴといふものが奮戰して屢〻佛軍を破り、其の植民

地を奪ひ、又ムガル朝のベンガル副王をも擊ち破つて（一七五七、乾隆二十二年）英人の威力を確乎不拔のものたらしめた。此の時ムガル帝國は愈〻衰へ亂れ、英人の勢力は日を逐うて增大し、一八〇四年（嘉慶九年）にはムガル皇帝は餘儀なく政權を東印度會社に讓り、會社より年金を受けることとなつた。

ムガル皇帝政權を東印度會社に讓る

英人は行政を改革し、鐵道・電信等を設けたが、風俗・習慣を異にした印度人は反つて之を怨み、一八五七年（咸豐七年）ガンジス河沿岸一帶の地に大叛亂が起り、英人は一年半を費して之を平定した。而してムガル皇帝は此の叛亂に與した爲め帝位を奪はれ、三百年の傳統あるムガル帝國は名實ともに全く滅びた。

ムガル帝國の滅亡

英國政府は之を機として東印度會社を廢し、其の政權を政府に收め、ついで英國女王ヴィクトリヤは兼ねて印度皇帝の位に卽いた（一八七七、光緒三年、明治十年）。

英國とビルマ

此の後數年にして、英國はビルマを征服して印度の一州とした（八一六八）。ついでマレー半島の諸小國は、請うて英國の保護國となつた（八一五九）。

歐人の東方に通商するや、一面武力を挾み、屢〻土地を侵略した。此れは、必ずしも初から政治上の野心を懷いた居た爲めでなく、政治整はず、生命・財産の安固を保證せられない此の地方に於いて貿易を營まんとすれば、勢ひ武裝して自ら守る必要があつたからである。英・佛人特に英人が印度を侵略するに至つた動機も同樣である。若しムガル帝國にして立派に統治せられ、國内が無事太平であり、武備も全かつたならば、英人が自ら多くの兵を蓄へるやうなことも起らず、ムガル帝國もやす〳〵とは滅されなかつたであらう。歐人に侵略せられた責任の一半は侵略せられた國民が負ふべきことに鑑みて、東洋に國するものは共に深く自ら警めなければならぬ。

英人鴉片を支那に賣る

第四章　鴉片戰爭　長髮賊の亂

英人の支那に對する貿易は、清の乾隆帝の頃から盛に爲り、其の商品の主なるものは印度に產する鴉片であつた。鴉片は、支那で初は藥用に供したのであるが、臺灣・福建地方に之を喫飲することが起り、

雍正・乾隆の頃、各地に傳播し、同時に其の輸入が劇增し、貿易は輸入超過と爲つて多額の銀が流出したのみならず、鴉片は甚しく人の身體を害し、精神を弱めることが次第に明に爲つたので、乾隆帝の子嘉慶帝(仁宗)の時、其の輸入を禁じたけれども效果無く、其の貿易は益〻旺盛に赴いた。嘉慶帝の子道光帝(宣宗)の時、湖廣總督林則徐は非常手段の必要を認め、廣東の英商の藏する鴉片二萬餘函を燒き棄て、ついで其の通商を禁じた(一八三九、道光十九年、天保十年)。英國政府は之を聞き、軍艦十餘隻を派して沿海の地を攻めしめ、英艦は或は白河に迫り、或は南京を脅し、清軍之を拒ぎかねたので、道光帝は大臣を南京に遣はし、英人に會して和を議せし

鴉片戰片

南京條約

南京條約

め、償金を出だし、香港を割譲し、上海・寧波・福州・厦門・廣東の五港を開くこととして、互に兵を收めた（一八四二）。此の戰爭を鴉片戰爭といひ、條約を南京條約といふ。

洪秀全

道光帝の時、廣東省花縣の民に洪秀全といふものがあつた。基督教に附會して一種の教を立て、自ら天父の次子、基督の弟と稱して信徒を集め、道光帝崩じて子咸豐帝（文宗）立つに乘じて亂を起し、國號を太平天國と定めた（一八五〇、道光三十年、嘉永三年）。其の兵強くして頻に清軍を破り、廣西より

太平天國

戈登

湖南に出で揚子江沿岸を席卷して南京を取り、茲を都とし、兵を分つて山西・直隸をも襲はしめ、清朝の運命殆ど危からんとしたが、名臣曾國藩・李鴻章並に雇將校英人戈登等の奮戰に依つて、十五年の後、遂に之を平定することを得た（一八六四、同治三年、元治元年）。此れを長髮賊の亂といふ。

十五年にして亂平ぐ

長髮とは亂徒が皆辮髮を罷め、頭髮を伸ばして居たのを指す。

長髮賊の亂の央に、アロー號事件が起つた。アロー號とは、英國の小船で、其の船中に隱れた支那人を廣東の兵士が捕へたことは、英國の怒を招いた。同時に、廣西に於いては、土民がフランス宣教師を殺害した。かくて英・佛二國と清國との間に紛議を生じ、二國聯合軍は天津・北京を攻め落した。咸豐帝は難を熱河に避けつゝ、ロシヤ公使の調停を納れて二國と和約を結び、償金を出だし、牛莊・芝罘・漢口等の七港を開き、基督教布教の自由を許すこととした（一八六〇、咸豐十年、萬延元年）。

アロー號事件

英佛聯合軍北京を陷る

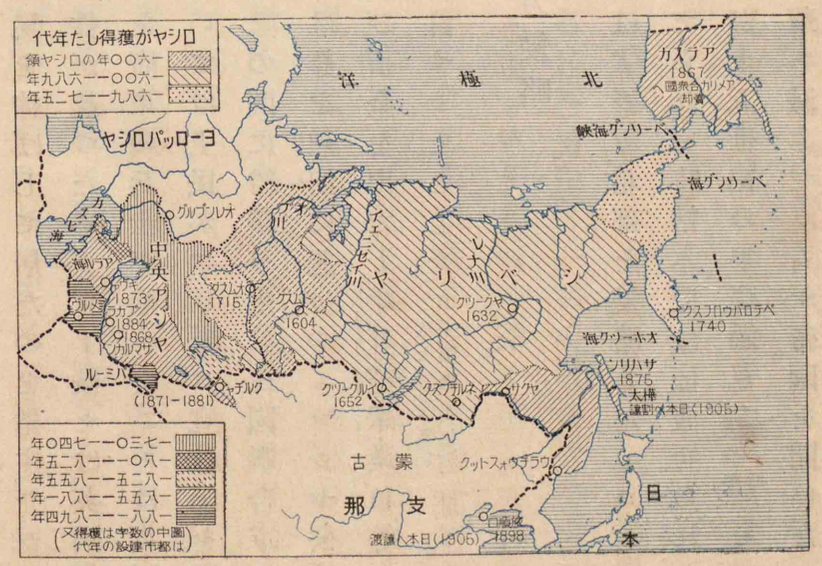
第五章　露・佛の東方侵略

清朝時代を通じて、ロシヤ帝國はアジヤ北部を侵略した。ロシヤの地には、元代以來、欽察汗國が建てられ、一時帖木兒に征服せられたけれども、國は猶ほ存續して居たが、十五世紀の半ば過ぎ（明の憲宗の時）モスコー大公イヴァン三世、欽察汗國を擊ち滅してロシヤ帝國を開いた。

ロシヤ帝國

シベリヤ侵略

イヴァン三世の孫イヴァン四世（明の神宗の時）以後、歴代、コサック人等を用ひてシベリヤの諸蠻族を征服し、殆ど無人の地を行くが如く、一瀉千里の勢を以て東に進み、清の順治帝の時には黒龍江上流に達し、ヤクサ（黒龍江北岸）を取つて城砦を築いた（一六五一、順治八年）。かくて露・清二國の衝突起り、康熙帝はヤクサの露人を撃ち破り、ネルチンスク條約に依つて外興安嶺を國境と定め、露人は一應嶺外に引き揚げた（一六八九、康熙二十八年）。而も露人は野心を棄てず、長髪賊の亂起るや、黒龍江に舟師



ロシヤの東方侵略圖

露領日本海に接す

を浮べて江北諸處を占領し、清國と愛琿（アイグン）條約を結んで、悉く江北を取り（一八五八、咸豐八年、安政五年）、ついで英佛聯合軍と清廷との間を調停した謝禮として、烏蘇里（ウスリ）江以東の地を讓らしめ（一八六〇、咸豐十年、萬延元年）、其の南端にウラヂウォストック軍港を設けた。是に於いてロシアの領土は始めて日本海に接した。

中亞侵略

ロシヤは、又十八世紀の前半（雍正帝の頃）から中央アジヤの侵略を企て、十九世紀の中頃（道光帝の時）にはキルギス部（アラル海の東北）を降して、清の伊犂と境を接した。而して清の同治帝（穆宗、道光帝の子）の時、伊犂回教徒の叛亂に乘じて此の地を占領して還さず、係爭數年、清の光緒帝（德宗、同治帝の次）の時、清國より償金を取り、且つ新に國境を定めて撤退した（一八八一、光緒七年、明治十四年）。キルギス部の南方にはキヴァ・ブハラ・コーカンドの三汗國があつたが、清の同治帝の時（慶應より明治の初）、いづれも露國に滅された。

越南と佛國

安南では、清の乾隆帝の頃から内亂が絶えなかつたが、嘉慶帝の時、阮福映（げんふくえい）といふもの、フランス宣教師の勸めに從つて佛國の援助を請

ひ、國内を統一して越南と號し（一八〇二、嘉慶七年、享和二年）、從來の例に倣つて清朝の封册を受けた。其の後、越南・フランス兩國の間に屢〻葛藤を生じたが、其の度毎に越南の國權は削減せられた。即ち一八六二年（同治元年、文久二年）には交趾支那を奪はれ、一八八三年（光緒九年、明治十六年）には東京（トンキン）地方を奪はれ、且つフランスの保護國と爲つた。越南が愈〻佛國の保護國と爲つた時、清國は異議を唱へ、佛國と戰つて敗れ、結局越南に對する發言權を放棄した（一八八五、光緒十一年、明治十八年）。是れより先、カンボヂャも自ら請うて佛國の保護を受けたので、佛國は安南・カンボヂャの二保護國と、其の領土なる交趾支那・東京とを一括して佛領印度支那と稱し、總督を置いて統治せしめた。

越南、保護國となる

佛領印度支那

第六章　日本の勃興　日清戰爭

日本の勃興

日本は極東の島嶼に國を建て、大陸の風雲に乘ずる機會に乏しかつたが、民俗勇武にして而も優雅に、君臣主從の義を重んじ、忠孝二に

して一、久しく封建制度を布き、アジヤに比類無き堅實なる發達を遂げた。江戸時代の末、アメリカ・ロシヤ・イギリス等の諸國來つて通商和親を强ひ、多少の葛藤を生じたけれども、彼等も日本の侮る可からざるを知つて、國土を侵さうとはしなかつた。而して明治維新の後、國を開いて世界と交り、歐洲の科學・法律等を學んで其の精華を攝取同化し、明治二十二年より立憲政治を行ひ、國力は駸〻として進んだ。而して先づ、從來東アジヤの最大勢力であつた清國と衝突した。此れが日清戰爭である。

日清戰爭の動機は朝鮮問題であつた。日本は維新以來朝鮮を獨立國として取扱ひ、明治九年（一八七六）通商條約を結んだ。歐米諸國も之に倣つてそれ〴〵條約を結んだ。然るに清國は太宗以來の舊例を墨守して屬國扱を爲し、日・清兩國の意志は矛盾しがちであつた。明治二十七年（一八九四、光緒二十年）朝鮮に東學黨の亂が起り、清國より先づ兵を派し、日本もついで居留民保護の爲めに兵を送り、且つ清國に向つて

朝鮮に於ける日清關係

東學黨の亂

日・清兩國共同して朝鮮の內政を改革し、叛亂の源を塞がんことを勸めたが、清國は聽かず、反つて朝鮮が其の藩屬であることを主張して、日本に撤兵を要求した。是に於いて兩國の交斷絕し、日本は朝鮮に駐屯しつゝあつた清兵を逐ひ、連戰連勝、遼東半島を取り、威海衞(東山)をも陷れた。清國恐れて和を請ひ、李鴻章を全權大臣に任命した。李は下關に來つて我が全權伊藤博文に會し、(一)朝鮮の獨立を承認し、(二)償金を出し、(三)遼東半島及び臺灣を割讓し、(四)沙市・重慶・蘇州・杭州の四港を開くことを約束した(明治二十八年、一八九五、光緒二十一年)。之を下關條約といふ。

李鴻章

下關條約

此の時、ロシヤは日本の遼東所有を以て東洋の平和に害ありと稱し、獨・佛二國を誘うて遼東半島を清國に還さんことを勸告した。日本は怨を呑んで之に從つた。

日清戰後の朝鮮

朝鮮は此の戰爭に依つて始めて眞の獨立國と爲り、國號を韓と改

めた。日本は韓國を助けて其の弊政を改革し、國家としての向上に勉めしめようとしたが、朋黨の爭と陰謀とが絕えず、日本の好意も動もすれば水泡に歸した。

第七章　戊戌の政變　北清事變

日清戰爭は清國の老衰爲す無きを暴露した。其の結果として二つの現象が起つた。一つは歐人が支那を一層烈しく壓迫し出したことで、ドイツは其の一宣敎師が暴民に殺されたのを機會として、膠州灣を租借(期限九十九年)し(一八九八、光緒二十四年、明治三十一年)、ロシヤは嘗つて日本に遼東還附を勸告した口を拭つて同半島を租借(期限二十五年)し(同年)、イギリスも之に對抗する爲め威海衞を租借し(同年)、フランスは廣州灣(廣東)を租借し(一八九九、光緒二十五年、明治三十二年)、支那分割の氣運が隱然として動き來つた。

光緒帝

列强の租借

變法自强

今一つは支那識者が覺醒して變法自强を唱へたことである。其の代表的人物は康有爲であつた。彼は廣東の一學究であつたが、光緒帝の信任を得て、政府に登用せられた。而して光緒帝は彼の意見を用ひて大に庶政を改革せんとしたが、西太后（同治帝の母）及び守舊派の大臣は之を悅ばず、力を協せて康有爲其の他の改革派を逐ひ、光緒帝を幽閉し、太后自ら國政を執つた（光緒二十四年）。之を戊戌の政變といふ。

戊戌の政變

西太后

戊戌の政變の後、保守的感情と歐人の跋扈を憎む心とが結び附いて、北支那一帶に外國人排斥の風を生じた。此れに育まれて起つたのは義和團といふ暴徒であつた。義和團は山東より直隸に入り、到る所基督教徒を殺戮し、遂に北京に入つたが、官兵も之に應じて共に外國公使館を圍んだ。因つて

北清事變

日・露・英・米・獨・佛・墺・伊の八個國聯合して兵を出だし、清軍を破つて公使館を救ひ、北京を占領し、光緒帝は太后と共に西安に奔つた（一九〇〇、光緒二十六年、明治三十三年）。翌年清廷は償金を出だし、首謀者を處罰して、列國と和した。我が國では之を北清事變といふ。

第八章　日露戰爭　韓國併合

露國と滿洲

北清事變の時、騷亂は滿洲に波及したので、ロシヤは、是れより先、日清戰爭後、清國の承諾を得て敷設したところの東清鐵道の保護に託して、大兵を滿洲に派遣し、要地を占領した。而して騷亂鎭靜するも兵を引き揚げず、一九〇二年（光緒二十八年、明治三十五年）、清國と滿洲還附條約を結んだけれども實行しないばかりでなく、翌年には更に兵を增派し、旅順・遼陽等の防備を嚴にした。清國の力を以てしては之を如何ともし難かつたので、日本は再三露國に交涉し、滿洲の領土保全を誓はしめんと勉めたが、露國は之に應ぜず、あまつさへ韓國を壓迫し、日本の勢

露國と韓國

日露戰爭

ポーツマス條約

日英同盟

力を韓國から驅逐せんと企てた。かくて此の儘に放任すれば、滿洲は露國の領土と化し、韓國もやがて其の轍を履み、引いて日本の安全が脅されるので、日本は意を決して戰を開いた（明治三十七年、一九〇四、光緒三十年）。日本軍は五道並び進んで敵を破り、旅順を陷れ、奉天に捷ち、海軍は遠くロシヤ本國より航し來つたバルチック艦隊を、對馬海峽に要擊して之を殆ど全滅せしめた。偶〻米國大統領ローズヴェルトは兩國に和睦を勸めたので、日本も之を納れ、小村壽太郎を米國ポーツマスに遣はし、露國全權ウィッテと會商せしめ、(一)露國は韓國に於ける日本の宗主權を認め、(二)兵を滿洲より撤し、(三)遼東半島の租借權、長春以南の鐵道を日本に讓り、(四)樺太南部を日本に割讓することを條件として、露國と和した（明治三十八年、一九〇五、光緒三十一年）。日本は此の戰に依つて自國の安全と利益とを保護し得たと同時に、支那の分割を防ぎ、十六世紀以來うち續いた歐人東漸の勢を阻止したのである。

日本と英國との東アジヤに於ける利害は略一致したので、兩國は明治三

韓國を保護國とす

韓國併合

十五年（一九〇二）同盟條約を締結し、締盟國の一國が二國以上と戰ふ時は他の一國は之を助くべきことを約した。此れは主としてロシヤの侵略に備へんが爲めであつた。日露戰爭に際しては、日本は此の同盟の爲めに間接の利益を得た。尙ほロシヤが一應清國に對して滿洲撤兵を約したのも、此の同盟の影響であつた。

日本は戰後、日韓協約を結んで、韓國を保護國とし（明治三十八年、一九〇五）、統監を派遣して其の政府を監督し、施政を改善せしめんとした。然るに韓人中之を喜ばずして屢〻叛亂を企て、或はロシヤに賴つて日本に叛かんとするものさへあつたので、日本は保護制度に依つて期待せられた效果を擧げ難きを覺り、遂に韓國を併合して一切の政權を收め、國土を朝鮮と稱し、總督を置いて之を統治せしめることとした（明治四十三年、一九一〇）。

日本の朝鮮に對する態度は三段に分かれる。初には獨立國たらしめようと勉めた。此れは明治初年より日露戰爭前に至る長い期間の事で、日清

戰爭も之が爲めに起されたのである。しかし日本の此の努力は失敗に歸したので、日露戰爭後は保護國として指導することとした。此れが第二段である。而して此の試みも亦成功の望無きに至つて、始めて併合を斷行したのである。此れが第三段である。朝鮮が平和の裡に文化の惠澤を受け、又張作霖(ちやうさくりん)全盛時代にも其の侵略を免れ、勞農露國の攪亂をも免れつゝあるのは、皆な併合の賜である。

第九章　清の滅亡

憲政の要求起る

日露戰爭の後、清國に於いては、日本の興隆の原因は立憲政治の施行にありと考へられ、速に憲政を樹立すべしとの要求が盛に起つたので、光緒帝は詔を發して、十年の後を期して國會を開くべきことを約した(一九〇八、光緒三十四年、明治四十一年)。光緒帝崩じ、皇姪宣統帝立ち、帝の年幼き爲め、實父醇親王(じゆんしんわう)政を攝するに及んで(同年)、輿論に聽いて國會開設の年限を短縮し、新しい內閣制度を實施するなど、着々其の準備を行つた。然

革命黨

武昌獨立

中華民國

孫文

袁世凱

るに間もなく革命の騷亂が起つた。清朝は滿洲より來つて支那を征服したものであるから、漢人中之を倒さんと志すものあるは怪しむに足らない。光緒の末、廣東の人孫文(逸仙)、湖南の人黃興等此の志を抱き、力を協せて革命黨を組織したが、北清事變の後、其の黨人次第に增加し、宣統幼帝立ち、清朝の威望愈〻衰へると共に、之に加はるものが益〻多數と爲つた。而して宣統三年(一九一一、明治四十四年)黨人は武昌を奪つて獨立を宣言し、黎元洪を推して都督としたところ、南北各省の中、清の官吏を逐うて之に應ずるもの前後十三省に及んだ。因つて諸省の代表者を南京に會して共和政府を組織し、國號を中華民國と定め、偶〻米國より還り來つた孫文を大總統に推擧した。清廷は袁世凱を總理大

臣とし、革命軍を伐たしめ、互に勝敗があつたが、やがて大勢の向ふ所を察して共和政體を認め、宣統帝は年金を受け、且つ帝號を繼續することを條件として退位し（一九一二、宣統四年、明治四十五年）、清朝は太祖以來十二世二百九十七年にして滅亡した。ついで孫文は職を辭し、袁世凱が代はつて大總統と爲つた（同年）。

清帝退位

第十章　中華民國

民國變遷の三期

清朝滅び、支那は名義上共和政體と爲つたが、而も共和の實は擧がらず、混亂に混亂を重ねて、局面變化の急なること走馬燈の如くであつた。其の過程は大體三期に分つことが出來る。第一期は一九一二年（民國元年）から一九一六年（民國五年）に至る五年間で、袁世凱が權力を一身に集めた時期である。孫文は大總統辭任後、革命黨を政黨に改造して國民黨と名づけ、黨中の名士が多く國會議員と爲つたが、袁は之に彈壓を加へて、或は殺し或は捕縛し、國會を骨拔とし、事實上專制政治

第一期

現代アジア
北極洋
ヤクーツク
ヴェルホヤンスク
オビ河
イェニセイ河
レナ河
ヤクーツク
ヴェルホヤンスク
カムチャツカ
オホーツク海
千島列島
樺太
日本海
朝鮮
京城
平壌
釜山
東京
大阪
名古屋
長崎
対馬海峡
黄海
東支那海
南支那海
台湾
海南島
フィリピン諸島
ルソン
マニラ
ボルネオ
セレベス海
ジャワ海
スマトラ
ジャワ
ボルネオ
ニューギニア
ビルマ
ラングーン
タイ
仏印
マレー
シンガポール
ペナン
ジャカルタ
ボンベイ
カルカッタ
ムルタン
ラホール
デリー
カラチ
ペシャワル
カブール
ヒマラヤ
ヒンドスタン
アラビア海
ペルシア湾
ルーパル
ブータン
ネパール
チベット
ルムシカ
ルムシカ
ルムシカ

現代アジヤ

本日
ヤシロ
スリギイ
スンラフ
國衆合カリメア
ダンラオ
ルガトルポ
1：50000000
ヤシロ
ヤシルペ
ヤリ
ヤジア央中
ヤビラア海
ヤンカーコ
カスピ海
ヤンタスニガフア
ヤンタスチルベ
ヤンタスニ
ヤンタスニ
ヤンタスニ

を行ひ、一九一五年（民國四年）自ら皇帝たらんとした。此の時、内にては蔡鍔等、第三革命軍を起して袁を討たんとし、外よりは諸外國が抗議を提出したので、袁は翌年帝制を取り消し、ついで悶死した。

第二期は一九一七年（民國六年）から、一九二八年（民國十七年）に至る十一年間で、清朝以來の舊文武官僚（曹錕、段祺瑞等）が政局の中心に立ち、互に勢力を爭ひ、或は起ち或は倒れ、國會も消滅し、共和の外形すら失はれ了はつた時期である。此の時期の末、北方では、滿洲に根據を据ゑた張作霖が最も優勢と爲り、北京に乘り出して大元帥と稱したが、一九二八年蔣介石の北伐軍に逐はれ、奉天に還らんとして途中で暗殺せられた。南方では一九一七年以來孫文、國民黨を率ゐて廣東に政府を立て、一九二二年（民國十一年）内訌の爲め一旦瓦解したけれども翌年再興し、孫文死（一九二五、民國十四年）後は、蔣介石・汪兆銘等が之を主宰した。而

蔣介石

第三期

して一九二六年（民國十五年）には、蔣介石、支那統一の志を抱いて北伐の途に就き、廣西より湖南に出で、沿江諸省を經略して南京に政府を移し、更に北進して張作霖を逐うて北京を取り（一九二八、民國十七年、昭和三年）、所謂北伐が一應成功を告げたのであつた。

第三期は一九二八年以後であつて、蔣介石が國民政府首席として、支那の中心勢力と爲つた時期である。國民政府は國民黨を基礎とするものであつたが、今や國民黨は事實上幾つかに分裂し、政府の威令は殆ど中央八九省以外に及ばず、中央部に於いても、江西・湖南・湖北・安徽・福建等の一部には共產軍が割據して暴威を振ふ有樣であつて、統一の業は前途猶ほ遼遠である。

蒙古

民國の初、外蒙古喇嘛教の首長活佛は、露國の後援を得て獨立を唱へ、ついで露國の保護國と爲り、民國政府と露國との間に紛議を生じたが、遂に民國は外蒙古に對して宗主權を維持し、外蒙古は自治權を得ることと定まつた（一九一五、民國四年）。

ロシヤに勞農政府起るに及び、外蒙

西藏

古の實權を握り、支那の宗主權は名のみと爲つた。西藏の教主達賴喇嘛も、民國の初、英國の助を借りて殆ど獨立した。

日本と支那

日本は世界大戰の時、聯合國に味方してドイツに宣戰し、其の租借せる膠州灣を占領した（大正三年、一九一四）。而して支那政府に交渉して、(一)日本は山東省に於けるドイツの利權を繼承すること、(二)遼東半島の租借期限を延長すること、(三)膠州灣は適當の時、支那に還附すること等を相約し（大正四年、一九一五）、數年の後、膠州灣の還附を實行した（大正十一年、一九二二年）。然るに支那は膠州灣の還附を感謝することなく、反つて其の條件を不當として怨み、爾來屢〻排日運動を起した。而して滿洲事變起るや、上海に於ける排日は險惡を極め、日本商品を奪ひ日本人に危害を加へたのみならず、支那軍隊が日本租界を包圍攻擊するに至つたので、日本は兵を派して之を擊ち懲らし（昭和七年二月）、其の兇暴を抑へた。

米國と支那

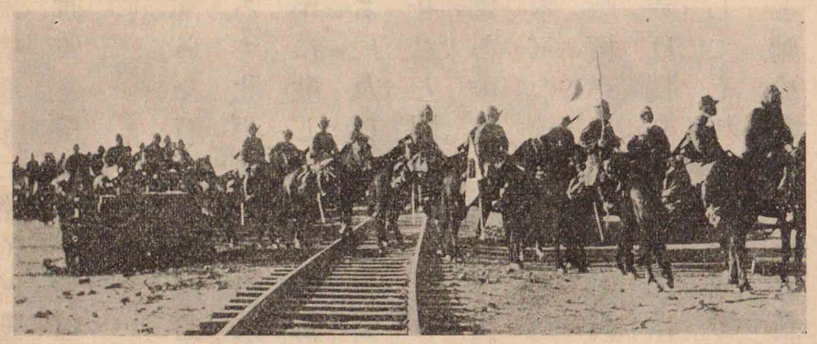
米國は支那の歡心を買ふに勉め、ワシントン會議の際、列國をして支那の主權尊重を約せしめたり（一九二一、民國十年）などしたので、支那人の信賴

を博し、支那人は動もすれば米國の力を借りて日本を排斥せんとする傾を生じた。勞農露國は孫文が廣東に政府を建設した頃から、其の請に依つて有力な援助を與へ、同時に支那を赤化せんと企てたが、北伐進捗し、南京に政府を移すに及び、蔣介石等は露國と絶ち應援の爲め派遣せられた露人を逐うた。一九二八年頃から支那に共産軍が組織せられ、上述の如く、江西湖南等に蔓延したが、勞農露國が之と連絡を通じ、間接に援助して居ることはいふまでもない。

清朝滅び民國興つて後、騷亂うち續き、國民の疾苦は清朝時代に數倍し、而して鞏固なる統一と平和とはいつ來るといふ見當もつかぬ。此れには樣樣の理由があらうが、要するに共和政治が現在の支那に適當しない爲めに外ならぬ。國々の政體は其の歴史・民族性等に依つて自ら定まるもので、一部人士の理想に依つて決定せられ得るものでないが、支那の現狀はよく之を示して居る。

第十一章　滿洲帝國の成立

張作霖死去の後、子學良其の職を繼ぎ、東北政務委員會首席と稱して滿洲統治の實權を握つて居た。作霖は表面日本に好意を寄せるやうに裝ひながら、陰に日本の利權を抑損しようと圖つたが、學良に至つては國民政府と提携して烈しい排日手段を執つた。其の結果、條約に背いて南滿洲鐵道に並行する鐵道を敷設したのを首として、日本の既得權益は頻々として侵害せられ、日本人の生命財産の安全も脅され、一九三一年（昭和六年、民國二十年）九月十八日夜には、遂に奉天郊外柳條溝に於いて、日本の南滿洲鐵道線路が張氏麾下の正規兵に



滿洲事變

依つて爆破せられるに至つた。是に於いて、租借地並に鐵道保護の爲め駐屯せる日本軍は自衛の爲め起つて支那軍を擊ち攘ひ、鐵道沿線の主要都市を占據した。

是れより先、張學良は一九三〇年（昭和五年民國十九年）蔣介石と閻錫山・馮玉祥等と相戰へる時、名を調停に藉りて兵を率ゐて北平に入り、爾來國民政府の陸海空軍副司令を兼ねて引續き北平に駐して居たが、柳條溝の變起り、日本軍が滿洲の各要地を占領するに及び、奉天地方より逃れ來れる兵を錦州に集結して、奉天を恢復せんと圖つたので、日本軍は進んで之を擊ち破り（一九三一年一月）、山海關以北は悉く日本軍の管理に歸した。

滿洲國皇帝

かくて張氏の政權が自ら崩壞したので、各地の要人は或は獨立を宣し、或は地方維持會を組織して、それ〴〵一地方の治安を保持せんと勉めたが、やがて新國

中華民國・滿洲國要圖

滿洲國皇帝

かくて張氏の政權が自ら崩壞したので、各地の要人は或は獨立を宣し、或は地方維持會を組織して、それ〴〵一地方の治安を保持せんと勉めたが、やがて新國

家建說の議が起り、遂に奉天・吉林・黑龍江・熱河・興安の五省が結束して一國を創立することと爲り、一九三二年（昭和七年）三月、國を滿洲國と號し、前淸の宣統帝溥儀を迎へて元首とし、之を執政と呼び、年號を立てて、大同といひ、都を新京に定めた。同時に張氏の苛政を除き、排外を禁じ、內を安んじ外に和するを以て政治の根本と爲すことを宣言した。九月、日本は滿洲國を承認し、同時に日滿議定書を交換し、兩國共同して國家防衞に當るべきことを約し、之が爲めに要する日本軍隊を滿洲國內に駐めしめることとした。越えて一九三四年（大同三年、昭和九年）三月溥儀執政は國民の要望に依つて皇帝の位に卽き、年號を康德と改めた。

新京市街

東洋史上の大勢と日本

北緯四十度に沿うてアジヤ大陸に一線を引け。古來の住民は、之に依つて二つに分類せられる。其の北に住むものは勇敢なる未開民族であり、其の南に住むものは優秀な文化を持つ民族であり、而して北方の未開民族は其の强猛な武力を恃んで動もすれば南方の文化民族を迫害した。西藏附近は例外であるが、其の他の部分卽ち支那・ペルシヤ・印度等に對しては此の說明は大體正確である。特に支那に於いて最も適切である。支那は上古から近世に至るまで、北方の遊牧民族――蒙古・トルコ・ツングス等――の爲めに常に侵略せられ、英武の君は奮然起つて之を征伐した。其の征伐の爲めには多くの人命と財とを失ひ、國家の疲弊を來したが、しかし此れは餘儀なき犧牲であつた。若し上に英武の君無く、下に文弱の風が吹きすさめば、北狄はなだれを打つて殺到し、支那の一部若しくは全部を征服して漢民族に君臨した。五胡十六國が其れである。後魏・後周が其れである。而して

金・元・清が又其れである。民族關係の上から觀れば、東洋の歷史は南方の文化民族と北方の未開民族との爭である。南方の民族は北狄と戰ひながら其の文化を建設し、且つ擁護した。

近世に至つて、南北對立の形勢に變調を來した。其れは歐人東漸の爲めであつた。歐人の智力は武力一偏の北狄に比して數等畏るべきものであつた。北狄の代表的勇者たる蒙古民族は嘗つて東ヨーロッパを蹂躙したが、歐人の東洋進出の結果は其れどころではなかつた。彼等の足の踏む所は其の領土と爲り屬國と爲り、彼等は文字通りにアジヤを席卷した。而して最後に此の大勢に反抗して之を阻止したものは、極東の島國日本であつた。日本は海上に國を建てて、北狄の侵略を被らず、南方文化國の弊害にも染まず、一種特別の發達を遂げた國である。

アジヤの文化の主なる源泉は支那と印度とである。印度は宗教・哲學・藝術を生んだ。支那では哲學も生まれたが、其れよりも道德・政治の學が發達した。文學・美術も特殊の發達を遂げた。印度の文化主として佛教は中央

アジヤを經て支那に入り、支那人は之を消化して新に自家獨得のものを作つた。而して佛教・儒教を中心とする印度・支那の文化は東して日本に入つた。

日本をアジヤの一國として觀察する時、其の國家としての堅實さが目だつ。支那には古くから革命が行はれ、君臣の道德が固まらず、引いて政治の健全なる發達を妨げた。支那では封建制度が早く滅びた。封建制度は國家發展の一階段として意義の多いもので、歐洲諸國も中古の封建時代を經過したことに依つて、其の基礎を鞏固ならしめたと認められて居る。然るに支那に於いては、封建が餘りに早く滅び、郡縣政治が餘りに早く成り立ち、其れが爲め地方行政の腐敗を誘ひ起した。斯樣な現象は日本には全く起らなかつた。

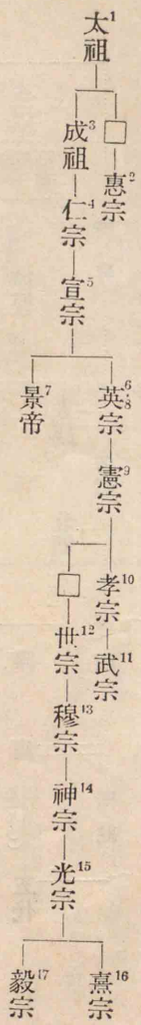
日本には萬世不易の皇室が儼存し、忠誠の德があらゆる道德の根柢として發達した。封建が長く繼續し、其の利益が十分に收められた。かくて、少くともアジヤに於いては他に比類なき堅實なる國家と爲つた。蒙古の侵

入軍を全滅せしめたのも此れが爲めである。歐人の東漸に際して國を全うしたのも此れが爲めである。明治時代に至つて露國東侵の鋭鋒を挫き、アジヤ諸民族の運命を双肩に荷ふやうに爲つたのも、かかる下地あるが爲めに外ならぬ。

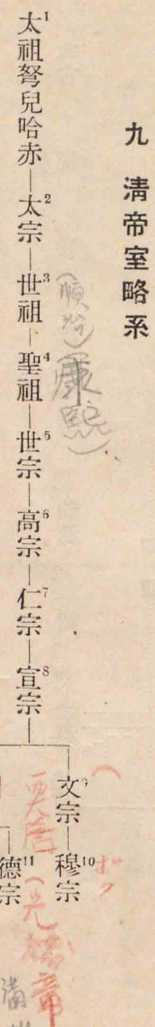
日本は建國以來二千餘年、長い歷史であるが、支那・印度の其れには及ばぬ。隨つて文化の上に於いて、日本は支那・印度の後進であつた。日本は此等諸國の文化を受け入れ、自家固有の精神に依つて之を取捨し、宗教・學藝其の他總べての方面に特殊の文化を樹立した。佛教も儒教も其の母國では衰へ、日本に於いて日本特殊のものと爲つて榮えた。維新以來は歐洲の文化を輸入し、前に印度・支那の其れに對して爲したと同樣に之を取捨し、消化しつつある。アジヤの文化もヨーロッパの文化も均しく日本に集まつて、日本固有の精神に依つて整理せられ、日本は正に東・西の文化を融合して新文化を造り出す大任を擔ひつゝある。喬木に風多しといふ。日本の前途には幾多の因難が横たはつて居るが、吾等は祖國日本の運命を信じ、祖先以來の傳

統に立脚しつゝ、一歩一歩確實に前進しなければならぬ。……終……

八　明帝室略系



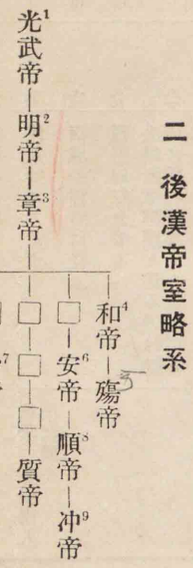
九　清帝室略系



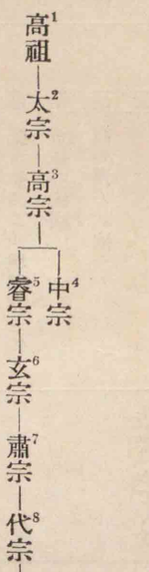
系圖

一 前漢帝室略系

二 後漢帝室略系

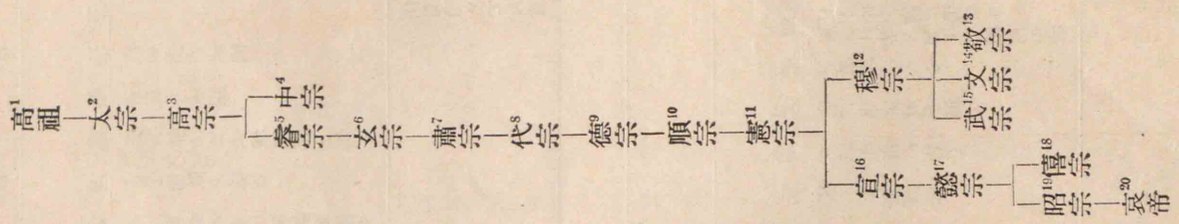


三 唐帝室略系

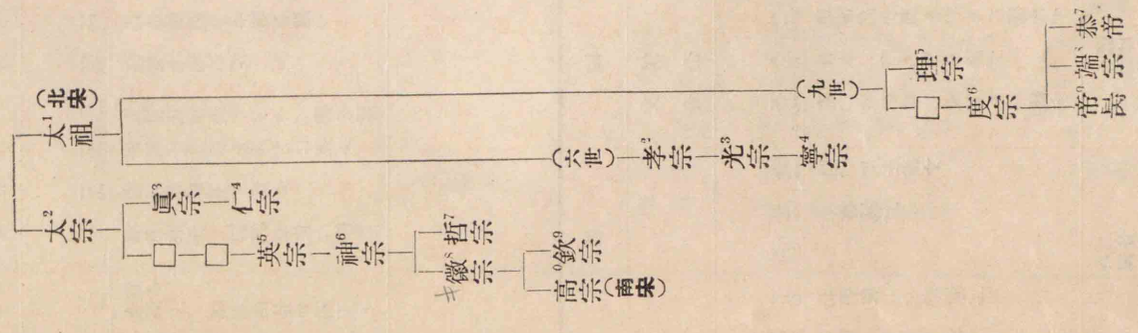


四 宋帝室略系

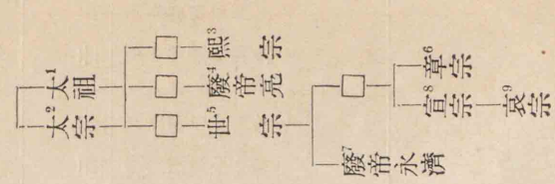
三　唐帝室略系



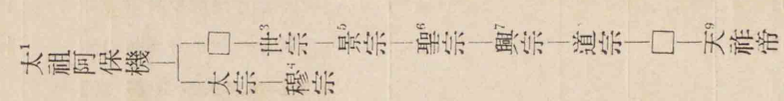
四　宋帝室略系



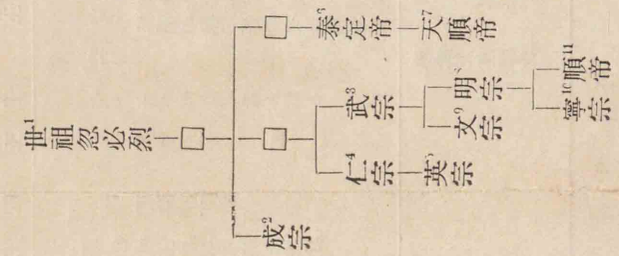
六　金帝室略系



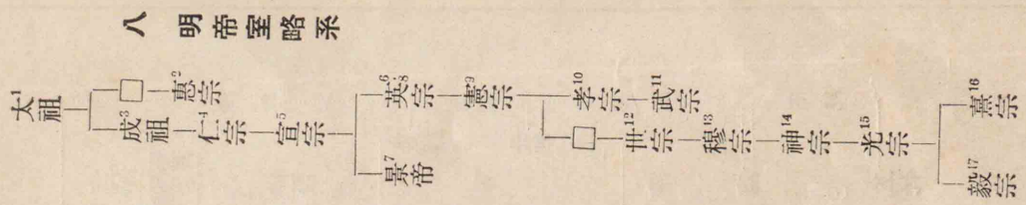
五　遼帝室略系



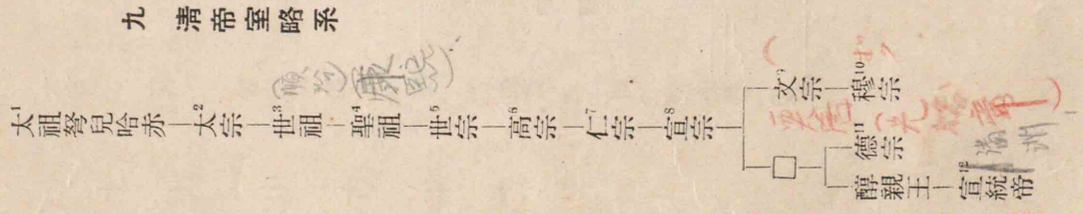
七　元帝室略系



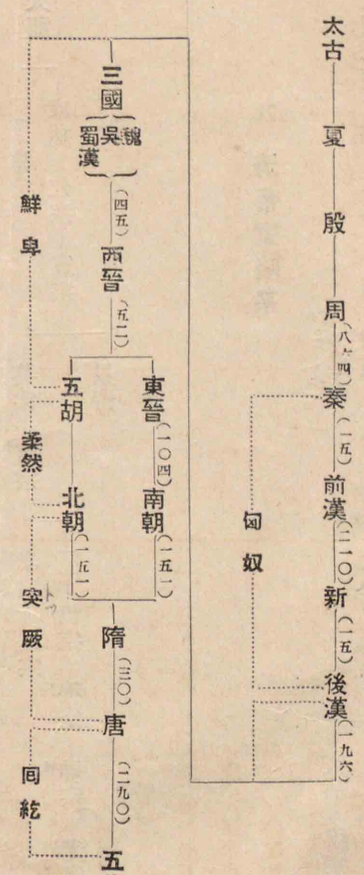
八　明帝室略系



九　清帝室略系



上古・中古年表



支那紀元	重要事項	國史
周		
武王 前一一一〇頃	武王建國、周と號す	
宣王 八二七	周宣王卽位	
春秋		
平王 七一〇	周室東遷	
惠王 六六七	齊の桓公霸者と爲る	
襄王 六三〇	城濮の戰、晉の文公霸者と爲る	
定王 五六五頃	釋迦生まる	
靈王 五五二	孔子生まる	
敬王 四八五	釋迦入滅す（八十）	
	孔子死す（七十四）	
戰國		
威烈王 四二五	威烈王卽位	
烈王 四〇三	韓・魏・趙諸侯と爲る	
顯王 三七二	孟子生まる（一二九九）	
慎王 三三三	蘇秦合縱策を唱ふ	
赧王 三一二	張儀連衡策を唱ふ	
	安息大夏の建國 二四八頃	
	秦、王政立つ 二四六	
	秦支那を一統す 二二一	神武天皇卽位
秦		
始皇帝	秦の始皇帝卽位 二二一	
	蒙恬匈奴を討つ 二二五	
	秦、書を焚く 二二三	
二世皇帝	秦、儒を坑にす 二二二	
	秦滅ぶ、項羽西楚の霸王と爲る 二〇六	
前漢		
高祖	項羽敗死し劉邦帝位に卽く 二〇二	
惠帝	衞氏朝鮮王と爲る 一九四頃	
文帝	匈奴、月氏を西方に逐ふ 一七〇頃	
	大月氏中央アジヤに國を建つ 一六〇	
景帝	吳楚七國の亂 一五四	
武帝	武帝始めて年號を建つ 一四〇	
	張騫西域より還る 一三六	
	衞・靑霍去病大に匈奴を破る 一二九	
	漢、朝鮮を平げ四郡を置く 一〇八	
宣帝	宣帝匈奴を破る 七三	
	鄭吉始めて西域都護と爲る 六〇	
元帝	新羅の建國 五七	
	高句麗の建國 三七	
成帝	百濟の建國 一六	任那始めて入貢
西晉		
武帝	晉、吳を滅し、天下を一統す 二八〇	百濟の王仁來朝
惠帝	八王の亂起る 二九一	
愍帝	西晉滅ぶ 三一六	
東晉		
元帝	東晉興る 三一七	
簡文帝	佛敎高句麗に傳はる 三七二	
孝武帝	前秦、江北を一統す 三七六	
	淝水の戰、苻堅大敗す 三八三	
	佛敎百濟に傳はる 三八四	
安帝	後魏興る 三九八	
	法顯印度に赴く 三九九	
	鳩摩羅什後秦に來る 四〇一	
	東晉滅ぶ、宋興る 四〇二	
	後魏、江北を一統す 四三九	
南北朝		
	後魏太武帝佛敎を迫害す 四四六	
	宋滅ぶ 四七九	
	齊滅ぶ 五〇二	
	後魏、東魏・西魏に分かる 五五四	
	北齊興る 五五〇	
	突厥、柔然を滅す 五五五	百濟聖明王佛敎を傳ふ
	北周興る、梁滅ぶ 五五七	
	北齊滅ぶ 五六二	
	隋、周を滅す 五七七	新羅、任那を滅し日本府滅ぶ
隋		
文帝	隋、陳を滅し天下を一統す 五八九	
煬帝	日本、隋と好を通ず 六〇七	
	煬帝高句麗を討ちて捷たず 六一三	小野妹子を隋に遣はす
唐		
高祖	隋滅ぶ、唐興る 六一八	
太宗	マホメット開敎紀元 六二二	
	唐の太宗卽位 六二六	
	玄奘印度に赴く 六二九	
	唐、東突厥を滅す 六三〇	
	景敎唐に入る 六三五	
	唐、吐蕃と和す。印度の戒日王使を唐に遣はす 六四一頃	
	大食國、ペルシヤを併す 六四二	

漢	景帝	一六〇	つ
		一五四	吳楚七國の亂
	武帝	一四〇	武帝始めて年號を建つ
		一二六	張騫西域より還る
		一一九	衛・青霍去病大に匈奴を破る
		一〇八	淳、朝鮮を平げ四郡を置く
	宣帝	七三	宣帝匈奴を破る
		六〇	鄭吉始めて西域都護と爲る
		五七	新羅の建國
	元帝	三七	高句麗の建國
		三三	
	成帝	一八	百濟の建國
新	王莽	後八	前漢滅ぶ、王莽國を建てて新と號す
		三三	王莽滅ぶ
後	光武帝	二五	後漢の復興
		五七	倭人始めて通ず
	明帝	七三	西域の經略に從ふ
	和帝	八九	竇憲匈奴を破る
		九一	班超西域都護と爲る。匈奴西に遁れ鮮卑その故地に據る
		九七	
漢	桓帝	一四八	安世高來る
		一六六	大秦海路より漢に通ず。黨錮の禍始まる
	靈帝	一八四	黃巾の賊起る
	獻帝	二〇〇	
		二〇八	赤壁の戰
三國		二二〇	後漢滅ぶ、曹丕魏國を建つ
		二二一	劉備蜀漢國を建つ
		二二六	安息滅びペルシヤ興る
		二二九	孫權吳國を建つ
		二三四	諸葛亮死す
		二四七	
		二六三	蜀漢滅ぶ

			筑紫の委奴國人漢に通ず
			任那始めて入貢
			熊襲叛す、日本武尊西征
			神功皇后御征韓
			百濟・新羅の入貢

隋	文帝	五八九	隋、陳を滅し天下を一統す
	煬帝	六〇七	日本、隋と好を通ず
		六一二	煬帝高句麗を討ちて捷たず
唐	高祖	六一八	隋滅ぶ、唐興る
		六三二	マホメット開教紀元
	太宗	六二六	唐の太宗卽位
		六二九	玄奘印度に赴く
		六三〇	唐、東突厥を滅す
		六三五	景教唐に入る
		六四一	唐、吐蕃と和す。印度の戒日王使を唐に遣はす
		六四二頃	大食國、ペルシヤを併す
		六四五	唐の太宗高句麗を討ちて捷たず
	高宗	六五五	大食國始めて唐に通ず
		六五七	唐、西突厥を滅す
		六六〇	唐、百濟を滅す
		六六八	高句麗滅ぶ、安東都護府を置く
		六七一	義淨印度に赴く
	中宗	六九〇	武后帝位に卽く
	睿宗	七一〇	
	玄宗	七一二	玄宗卽位
		七一三	渤海國興る
		七二八	吐蕃入寇す
		七五五	安史の亂起る
	肅宗	七五六	玄宗蜀に奔り位を肅宗に讓る
	代宗	七六三	安史の亂平ぐ
	德宗	七八〇	兩稅の法を定む
		七九四	
		八〇四	
	憲宗	八一〇	憲宗宦官に弑せらる
	武宗	八四五	武宗佛教を迫害す
	僖宗	八八〇	黃巢長安を陷る
	昭宗	八九四	
	哀宗	九〇七	朱全忠國を簒ふ

			小野妹子を隋に遣はす
			大化の改新
			奈良奠都
			渤海國始めて入朝
			平安奠都
			最澄・空海入唐
			遣唐使停止

近古年表

五代（梁（一七）唐（一四）晉（二）漢（四）周（一〇）（五四）北宋（一六七）南宋（一五〇）元（九八）明（二七七）清

〔遼〕——（二一〇）——〔金〕——（二一〇）——後金

〔西夏〕——（一九〇）——〔蒙古〕——（一二一）——蒙古諸汗國

帖木兒帝國

ムガル帝國

支那紀元	重要事項	國史
五代	九〇七 唐滅び梁興る	
	九一六 契丹の耶律阿保機、帝と稱す	
	九二三 梁滅び後唐興る	
	九二六 契丹、渤海を滅す	
	九三六 高麗、新羅を滅す。晉興る	
	九四六 契丹、晉を滅す	
	九四七 契丹、國を遼と號す。漢興る	
	九五〇 漢滅び周興る	
北宋 太祖	九六〇 周滅び宋興る	
太宗	九七九 宋の太宗天下を一統す	
眞宗	九九 遼、高麗を服す	
	一〇〇四 遼の聖宗宋を討つ（澶州の役）	
仁宗	一〇一九	刀伊の賊入寇
	一〇三八 西夏の建國	
	一〇四四 仁宗西夏と和す	
	一〇五四 大越國興る	
神宗	一〇六九 王安石新法を行ふ	
哲宗	一〇八六 司馬光・王安石死す	
徽宗	一一一五 女眞の阿骨打國を金と號す	
	一一二〇 宋・金同盟す	
欽宗	一一二七 遼滅ぶ	
	一一二六 金軍開封に迫る	

支那紀元	重要事項	國史
元 恭帝	一二七四 元、日本を侵す	文永の役
	一二七五 マルコ＝ポーロ元に來る	
世祖	一二七六 南宋滅ぶ	
	一二八一 元、日本を征し大敗す	弘安の役
	一二九四 世祖死す	
成宗	一三〇三 海都の亂平ぐ	
武宗	一三一〇 窩闊台汗國滅ぶ	
順帝	一三三三 順帝卽位	北條氏滅ぶ
太祖	一三六八 元滅び明興る	
	一三六九 帖木兒サマルカンドに都す	
	一三九二 李成桂朝鮮國を建つ	
	一三九三 帖木兒伊兒汗國を併す	
	一三九五 帖木兒欽察汗國を定む	
惠帝	一三九九 帖木兒印度を侵す。燕王棣兵を起す	
成祖	一四〇二 明の成祖卽位。帖木兒アンゴラにトルコ軍を破る	
	一四〇五 帖木兒死す。鄭和始めて南海に航す	
	一四〇九 成祖韃靼を親征す	
	一四一四 成祖瓦剌を親征す	
	一四二一 成祖都を北平に遷す	
英宗	一四四九 英宗擒となる	
憲宗	一四六七	應仁の亂起る
武宗	一四九八 ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度航	

近古年表

五代（梁（一七）唐（一四）晉（二）漢（四）周（一〇）（五四）北宋（一六七）南宋（一五〇）元（九八）明（二七七）清
〔遼〕（二一〇）
〔西夏〕（一九〇）
〔金〕（二一〇）
〔蒙古〕（十一）
後金

支那紀元	重要事項	國史
五代		
九〇七	唐滅び梁興る	
九一六	契丹の耶律阿保機、帝と稱す	
九二三	梁滅び後唐興る	
九二六	契丹、渤海を滅す	
九三六	高麗、新羅を滅す。晉興る	
九四六	契丹、晉を滅す	
九四七	契丹、國を遼と號す。漢興る	
九五〇	漢滅び周興る	
北宋		
太祖 九六〇	周滅び宋興る	
太宗 九七九	宋の太宗天下を一統す	
眞宗 九九	遼、高麗を服す	
一〇〇四	遼の聖宗宋を討つ（澶州の役）	
一〇一九		
仁宗 一〇三八	西夏の建國	
一〇四四	仁宗西夏と和す	
一〇五四	大越國興る	
神宗 一〇六九	王安石新法を行ふ	
哲宗 一〇八六	司馬光・王安石死す	
徽宗 一一一五	女眞の阿骨打國を金と號す	
一一二〇	宋・金同盟す	刀伊の賊入寇
一一二七	遼滅ぶ	
欽宗 一一二六	金軍開封に迫る	
南宋		
高宗 一一二七	北宋滅ぶ	
一一三八	宋室南遷	
一一四一	秦檜金と和を結ぶ	
一一五三	金、燕京に遷都す	
孝宗 一一六二	金の世宗卽位	
一一六二	宋の孝宗卽位	
光宗 一一九二		
寧宗 一二〇六	成吉思汗蒙古を一統す	
一二一九	成吉思汗の西征	爲朝征夷大將軍と爲る
理宗 一二三三	蒙古軍オロスに侵入す	
一二三七	西夏滅ぶ。成吉思汗死す	
一二三四	金滅ぶ	
一二三六	拔都の西征	
一二五四	旭烈兀の西征	
一二五八	バグダッド陷り大食國滅ぶ	
度宗 一二六〇	元の世祖卽位	
一二六八	海都叛す	
一二七一	世祖國號を立てて元といふ	蒙古の使者來る

支那紀元	重要事項	國史
元		
恭帝 一二七四	元、日本を侵す	
一二七五	マルコ＝ポーロ元に來る	
世祖 一二七六	南宋滅ぶ	
一二八一	元、日本を征し大敗す	文永の役
一二九四	世祖死す	
成宗 一三〇三	海都の亂平ぐ	弘安の役
武宗 一三一〇	窩闊台汗國滅ぶ	
順帝 一三三三	順帝卽位	北條氏滅ぶ
太祖 一三六八	元滅び明興る	
一三六九	帖木兒サマルカンドに都す	
一三九二	李成桂朝鮮國を建つ	
一三九三	帖木兒伊兒汗國を併す	
一三九五	帖木兒欽察汗國を定む	
一三九九	帖木兒印度を侵す。燕王棣兵を起す	
惠帝		
成祖 一四〇二	明の成祖卽位。帖木兒アンゴラにトルコ軍を破る	
一四〇五	帖木兒死す。鄭和始めて南海に航す	
一四〇九	成祖韃靼を親征す	
一四一四	成祖瓦剌を親征す	
一四二一	成祖都を北平に遷す	
一四四九	英宗擒となる	
英宗		
憲宗 一四六七		應仁の亂起る
武宗 一四九八	ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度航路を發見す	
世宗 一五一〇	ポルトガル人ゴアを占領す	
一五二六	ムガル帝國興る	
一五三七	ポルトガル人マカオ港を占領す	
一五四一	韃靼、明に寇す	
一五四三		ポルトガル人日本に來る
一五五六	アクバル帝立つ	
一五六五	スペイン人フィリッピン群島を占領す	
一五八三	努兒哈赤滿洲に起る	
一五九二	萬曆朝鮮の役起る	文祿の役
一六〇〇	英人東印度會社を起す	關原役
一六〇四	佛人東印度會社を起す	豐臣氏滅ぶ
一六一五	努兒哈赤國號を立てて後金といふ	家康薨ず
一六一六	蘭人ジャヴァに據る	
熹宗 一六一九	蘭人臺灣を占領す	
一六二四	後金の太宗國號を清と改む	
毅宗 一六三六	李自成北京を陷る、毅宗自殺し明滅ぶ	
一六四四		

近世年表

清——（一一六八）——中華民國

支那紀元	重要事項	國史
清		
世祖		
一六四四	清、李自成を破る、都を北京に遷す	
一六四五	清、辮髪令を下す	
一六五八	アウラングゼブ帝卽位	
一六六一	清の一統、鄭成功臺灣に據る	鄭成功援を請ふ
一六六二	康熙帝卽位（—一七二二）	
聖祖		
一六七三	三藩の亂起る	
一六七八	準噶爾部天山南路を占む	
一六八一	吳三桂等の亂平ぐ	
一六八三	臺灣、清の領土と爲る	
一六八九	ネルチンスク條約	
一六九七	外蒙古、清の領土と爲る	
一七二〇	西藏、清の領土と爲る	
世宗		
一七二四	西藏に駐藏大臣を置く	
一七二七	キャクタ條約	
高宗		
一七三五	乾隆帝卽位（—一七九六）	
一七四三	英人クライヴ印度に來る	
一七五七	高宗準噶爾を征服す	
一七六〇	清、天山南路を平定す	
一七七四	ヘスチングス印度總督となる	
一七八六	シャム、清に朝貢す	
一七八九	安南、清に朝貢す	
一七九〇	ビルマ、清に朝貢す	
一七九二		
仁宗		
一八〇二	阮福映安南を一統す	
一八〇四	英人ムガル帝國の實權を握る	
宣宗		
一八二〇	道光帝卽位	
一八三九	鴉片戰爭起る	
一八四二	南京條約	
一八四七	ムラヴィヨフ東シベリヤ總督と爲る	
一八五〇	長髮賊の亂起る	
文宗		
一八五六	英・佛兩國、清に宣戰す	
一八五七	印度土民の亂	
一八五八	ムガル帝國滅ぶ。愛琿條約	
一八五九	佛國、サイゴンを占領す	
一八六〇	英佛聯合軍北京を占領す、北京條約	
一八六二	安南、佛國と和す	
穆宗		
一八六三	朝鮮王李熙立つ、大院君攝政	
一八六四	長髮賊の亂平ぐ	
一八六七	佛國、カンボヂャを保護國とす	
一八六八	露國、ブハラ汗國を降す	
一八七一	露國、伊犂を占領す	
一八七三	露國、キヴァ汗國を降す	
德宗	光緒帝卽位	

支那紀元	重要事項	國史
清		
德宗		
一八七六	露國、コーカンド汗國を滅す	
一八七七	英國女王ヴィクトリヤ印度皇帝と稱す	
一八八一	伊犂條約	
一八八三	安南、佛國の保護國と爲る	西南の役
一八八四	清佛戰爭起る	朝鮮事變（甲申の變）
一八八五	天津條約	天津條約
一八八六	ビルマ、英領と爲る	
一八八七	佛領印度支那成立	
一八八九		憲法發布
一八九四	日清戰爭起る	日清戰爭起る
一八九五	下關條約	三國干涉
一八九七	ドイツ、膠州灣を租借す	
一八九八	露・英・清の港灣を租借す。米國フィリッピン群島を讓り受く	
一八九九	フランス、廣州灣を租借す。義和團の暴動起る	
一九〇〇	露國、滿洲を占領す	
一九〇二	日英同盟	
一九〇四	日露戰爭起る	日露戰爭起る
一九〇五	ポーツマス條約。日英同盟の擴張	日韓協約
一九〇六	清朝憲政準備の詔を下す	
一九〇七		日佛・日露協約
一九〇八	西太后及び光緒帝崩ず	日米覺書を交換す
一九一〇		韓國併合
宣統帝		明治天皇崩御、大正天皇踐祚
一九一二	革命黨蜂起す。蒙古の獨立	
一九一三	清朝滅ぶ	
一九一三	中華民國成立、袁世凱大總統就任、列國支那共和國を承認す	日獨開戰
一九一四		日英同盟廢棄
中華民國		
一九一六	袁世凱死す、黎元洪大總統と爲る（—一九一七）	大正天皇崩御、今上天皇踐祚
一九一七	民國、獨・墺に宣戰す。孫文廣東に軍政府を建つ	
一九一八	徐世昌大總統となる（—一九二三）	
一九二二	民國、ワシントン會議に參加す	
一九二三	山東問題解決。黎元洪大總統と爲る（—一九二三）	
一九二三	曹錕大總統と爲る（—一九二四）	
一九二四	段祺瑞臨時執政と爲る	
一九二五	孫文死す	
一九二六	蔣介石、廣東政府の命を受けて北伐の師を起す	
一九二七	蔣介石、南京に國民政府を建つ、張作霖北京に在りて大元帥と稱す	
一九二八	國民政府軍、張作霖を逐うて北京を占領す、北伐完成	
一九三〇	閻錫山・馮玉祥、蔣介石を伐つて敗る	
一九三二	滿洲事變	滿洲國承認
一九三三	上海事變。滿洲國成立	國際聯盟脫退

清

世宗	一六八九	ネルチンスク條約
	一六九七	外蒙古、清の領土と爲る
	一七二〇	西藏、清の領土と爲る
	一七二四	西藏に駐藏大臣を置く
	一七二七	キャクタ條約
高宗	一七三五	乾隆帝卽位(—一七九六)
	一七四三	英人クライヴ印度に來る
	一七五七	高宗準噶爾を征服す
	一七六〇	清、天山南路を平定す
	一七七四	ヘスチングス印度總督となる
	一七八六	シャム、清に朝貢す
	一七八九	安南、清に朝貢す
	一七九〇	ビルマ、清に朝貢す
	一七九二	
仁宗	一八〇二	阮福映安南を一統す
	一八〇四	英人ムガル帝國の實權を握る
	一八二〇	道光帝卽位
宣宗	一八三九	鴉片戰爭起る
	一八四二	南京條約
	一八四七	ムラヴィヨフ東シベリヤ總督と爲る
	一八五〇	長髮賊の亂起る
文宗	一八五三	
	一八五六	英・佛兩國、清に宣戰す
	一八五七	印度土民の亂
	一八五八	ムガル帝國滅ぶ。愛琿條約
	一八五九	佛國、サイゴンを占領す
	一八六〇	英佛聯合軍北京を占領す、北京條約
穆宗	一八六二	安南、佛國と和す
	一八六三	朝鮮王李熙立つ、大院君攝政
	一八六四	長髮賊の亂平ぐ
	一八六七	佛國、カンボヂャを保護國とす
	一八六八	露國、ブハラ汗國を降す
	一八七一	露國、伊犂を占領す
	一八七三	露國、キヴァ汗國を降す
德宗	一八七四	光緒帝卽位

露艦蝦夷に來る

ペリー來朝

幕府、米・佛・蘭・露・英と假條約を結ぶ

櫻田門の變

英艦薩摩に寇す

英・佛、長門に寇す

明治天皇踐祚、王政復古

征韓論起る

臺灣征伐

清

宣統帝	一八八九	
	一八九四	日清戰爭起る
	一八九五	下關條約
	一八九七	露・英、清の港灣を租借す。米國フィリッピン群島を讓り受く
	一八九八	ドイツ、膠州灣を租借す
	一八九九	フランス、廣州灣を租借す。義和團の暴動起る
	一九〇〇	露國、滿洲を占領す
	一九〇二	日英同盟
	一九〇四	日露戰爭起る
	一九〇五	ポーツマス條約。日英同盟の擴張
	一九〇六	清朝憲政準備の詔を下す
	一九〇七	
	一九〇八	西太后及び光緒帝崩ず
	一九一〇	
	一九一一	革命黨蜂起す。蒙古の獨立
	一九一二	清朝滅ぶ
	一九一三	中華民國成立、袁世凱大總統就任、列國支那共和國を承認す
中華民國	一九一四	
	一九一六	袁世凱死す、黎元洪大總統と爲る(—一九一七)
	一九一七	民國、獨・墺に宣戰す。孫文廣東に軍政府を建つ
	一九一八	徐世昌大總統となる(—一九二三)
	一九二一	民國、ワシントン會議に參加す
	一九二三	山東問題解決。黎元洪大總統と爲る(—一九二三)
	一九二三	曹錕大總統と爲る(—一九二四)
	一九二四	段祺瑞臨時執政と爲る
	一九二五	孫文死す
	一九二六	蔣介石、廣東政府の命を受けて北伐の師を起す
	一九二七	蔣介石、南京に國民政府を建つ、張作霖北京に在りて大元帥と稱す
	一九二八	國民政府軍、張作霖を逐うて北京を占領す、北伐完成
	一九三〇	閻錫山・馮玉祥、蔣介石を伐つて敗る
	一九三一	滿洲事變
	一九三二	上海事變。滿洲國成立
	一九三三	

憲法發布

日清戰爭起る

三國干涉

日露戰爭起る

日韓協約

日佛・日露協約

日米覺書を交換す

韓國併合

明治天皇崩御、大正天皇踐祚

日獨開戰

日英同盟廢棄

大正天皇崩御、今上天皇踐祚

滿洲國承認

國際聯盟脫退

昭和五年十一月十日印刷
昭和六年十一月十三日發行
昭和九年八月三十日訂正再版發行
昭和十年九月十八日訂正三版發行
昭和十一年一月十五日訂正四版印刷
昭和十一年一月十八日訂正四版發行

改訂女子東洋史

定價金八拾參錢

著作權所有

著者　加藤繁

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社富山房

代表者　同所富山房社長　坂本嘉治馬

印刷所　東京市神田區錦町三丁目一七番地　精興社

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社富山房

電話神田二、一七一、二、一七八番
振替口座東京五〇一番

第三學年　大谷都美子

広島大学図書
2000067149